



2025年3月31日 第61号

JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報渉外委員会

第68回日本手外科学会 学術集会開催にあたって

三 上 容 司

横浜労災病院 運動器センター

この度、第68回日本手外科学会学術集会を、2025年4月10(木)、11日(金)の2日間、横浜のパシフィコ横

浜ノースで開催させていただきます。開催形式は現地開催を主とし、一部オンデマンド配信を予定しています。一市中病院の勤務医の身で、このような大役を仰せつかったこと、大変光栄に存じております。

さて、本学術集会のテーマは、Well-beingな手外科といたしました。Well-beingは、人が身体的のみならず、精神的、社会的にも健全な状態を指します。手外科が手のみならず、人々のWell-beingにどれだけ貢献してきたのか、あるいは、これからどのように貢献すべきかという思いから、本テーマに決めました。そして、このテーマを紡ぐ縦糸と横糸として、領域横断的視点とライフコースの視点を取り入れました。この学術集会を通して、手外科のWell-beingへの貢献、あるいは求められる役割といったことに思いを深めていただければ、主催者としてこれに勝る喜びはありません。そして、手外科医は手を癒すだけでなく、人を癒せることを世の中の人々に知っていただきたいと考えています。

学術集会では、一般演題に加えて、シンポジウムは全身疾患と手外科、ライフコースに関わる手外科など11、パネルディスカッション1、教育研修講演13、Journal Clubなどを準備しています。また、理事長講演のほか、特別講演として渋滞学で有名な西成活裕先生、手の倫理に関して

目 次

- 第68回日本手外科学会学術集会開催にあたって
- JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記
- JSSH-HKSSH Traveling Fellow報告記
- JSSH-KSSH Travelling Fellow報告記
- JSSH-TSSH Traveling Fellow報告記
- 手外科ハドンリレー(第14回)
- 第18回 手外科医のリスクマネジメント
- Joyの声(第11回)
- リレーエッセイ:技術紹介
- 物故会員への追悼文
- 委員会報告
- 教育研修会・学術集会お知らせ
- 関連学会・研究会のお知らせ
- 編集後記

伊藤亜紗先生にご講演をお願いしております。海外からは、米国、カナダ、フランスから計3名の先生方に招待演者としてご講演いただく予定です。また、今回は、日手会の委員会からの企画を例年より多く7つのセッションとして取り上げました。特別企画として、日本ハンドセラピー学会、日本整形外傷学会との合同シンポジウムを準備しています。また、教育研修ワークショップとして、Half-millimeter Microsurgeryと神経伝導検査の2つを企画しました。一部有料となりますが、実際に機器に触れて技術を習得できる貴重な機会となります。漫画「テノゲカ」は、手外科を世の中に発信する貴重な媒体となっています。「テノゲカ」を描いた原作者、漫画家をお招きして、市民を交えた企画も準備しています。また、従来の学術集会にくらべ、より多くの女性医師に座長を務めていただくようにいたしました。

今回の学術集会が会員の皆さまに実りあるものとなるよう、東京大学整形外科学教室の支援のもと、手外科・末梢神経グループの総力を結集して準備を進めています。東京大学手外科・末梢神経グループが本学術集会を担当するのは、1969年に津山直一教授が会長を務められて以来となり、実に56年ぶりとなります。参加者には、春爛漫の港横浜をお楽しみいただきつつ学術集会にご参加いただけますよう鋭意準備を進めているところです。多数の会員の皆様のご参加を心よりお待ち申し上げて、会長のあいさつとさせていただきます。



パシフィコ横浜ノース

JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記

河 村 真 吾

岐阜大学

2024年JSSH-ASSH Traveling Fellowに選出して頂き、ASSH international traveling fellowship programに参加させて頂きましたのでご報告いたします。私たちのグループは大阪大学の宮村聡先生、チリからのCarlos Gomez先生の3名でした。

まずStanford大学から研修を開始しました。Amy Ladd先生、Jeffrey Yao先生、Robin Kamal先生による、母指CM関節症に対するsuture suspension、鏡視下TFCCデブリードマンやガングリオン切除など、私の興味ある手術を多数拝見できました。手術は指導医とレジデントのペアで行われており、レジデントが教育を受けながら執刀していました。手術内容だけでなく若手医師の指導法についても大変勉強になりました。夕方にはレストランにて、プレゼンテーションの機会を頂きました。多数のDrが熱心に聞いて下さり、嵐のように質問を受けました。せっかくの食事が喉を通らないくらい緊張しましたが、James Chang先生、Yao先生をはじめ、皆さんが優しく接して下さり、楽しい時間を過ごすことができました。



左よりDr. Gomez, Dr. Kamal, 宮村先生、河村



プレゼンテーション後 Dr.Yaoと記念撮影

次はNew Mexico大学でした。研修前日からDeana Mercer先生にCadaver labにお招き頂きました。学生、レジデントらが精力的に上腕骨遠位端骨折に対するplate固定を行っていました。その後、Mercerご夫妻・息子さんとディナーもできまして、母として、教授としてパワフルに働く姿を直に感じさせて頂きました。手術症例は少なかったものの、Nathan Morrell先生による橈尺骨癒合症に対するKanaya法を見学できました。実は、2年前に金谷文則先生に岐阜大学へお越しいた danki、



Dr. Mercerとレジデント (Cadaver labにて)



サンディア山山頂からの風景

Kanaya法を施行して頂いた経験がありましたので、Morrell先生が興味深く質問してくれました。また、Mercer先生がSandia Peak Tramwayを手配してくださり、サンディア山山頂からの風景を満喫させて頂きました。

ミネアポリスでのASSH annual meetingの前に、宮村先生の留学先の恩師であるNeal Chen先生を訪ねてボストンへ飛びました。Chen先生の案内でMGH見学、そしてBoston Children's hospitalにてAndrea Bauer先生、Donald Bae先生の外来を見学させて頂きました。ASSHは人生初参加でしたが、盛大な学会であり世界各国から参加者がおりました。慶応大学の佐藤和毅先生、岩本卓士先生、岡山大学の齋藤太一先生、中道亮先生にお会いでき、久々の日本人との対面にホッとしました。



ASSH学会会場にてDr. Morrell (左)、Dr. Kamal (中)、佐藤先生と岩本先生 (右)

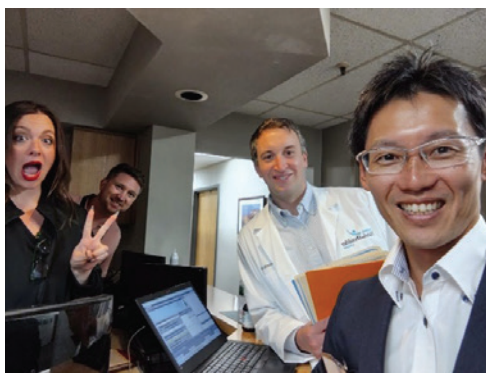
Michigan大学ではKevin Chung先生の手術と外来を見学させて頂きました。7:30から7件 (TFCC縫合、舟状骨偽関節、人工指関節置換術等) の手術を立て続けに行い、18:00には終了という衝撃的なスピードでした。最後に、「You should always think, not just watch it like a video!」と見学者の姿勢について熱いご指導を頂きました。

最後はIndiana Hand to Shoulder Centerを訪問しました。朝7:00! からプレゼンテーションを行い、外来、手術へと移動しました。レジデントが指導医 (Greg Merrell先生とRobert Baltera先生) の元で定型手術を数多く執刀していました。Merrell先生にはディナーにも招待頂き、Smetana先生、Schmid先生、レジデント6人と楽しい時間を過ごさせて頂きました。非常に仲の良いチームだと感じました。

最後に、Fellowshipの3週間、寝食と様々な苦楽を共にしてくださった宮村先生、またユーモアあふれるトーク、自分の拙い英語力のサポートをしてくれたGomez先生には感謝の気持ちで一杯です。良き友人ができたことも人生の大きな財産となりました。このような貴重な機会を与えて頂きました国際委員会の先生方、日頃から温かいご支援を頂いております諸先生方に心から感謝申し上げます。本Fellowshipで得た人脈をつなぎ、微力ながら日手会のお役に立てるよう精進したいと思います。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



Indianaでのプレゼンテーション



Indianaでの外来診察終了後 記念撮影



Michigan大学でのプレゼンテーション後 Dr. Chungのグループメンバーと一緒に

JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記

宮 村 聡

大阪大学大学院医学系研究科 器官制御外科学（整形外科）

2024年9月7日から9月30日までの期間、岐阜大学整形外科の河村真吾先生とともに、チリからのDr. Carlos Gomezを加えた3人で米国各地の手外科関連施設を訪問し、期間中にはASSH Annual Meetingにも参加する機会を頂きました。訪問先で得た貴重な経験について本紙面をお借りして報告させていただきます。

Stanford University (Palo Alto, California)

Host: Jeffrey Yao, MD

母指CM関節症に対するTightRope使用のパイオニアであるDr. Yaoから、本術式のtipsを直接教わることができました。特に、大菱形骨切除に用いられていた器械(elevatorの一種です)は非常に有用であり、早速、当院でも導入を検討しています。また、舟状月状骨解離やSLAC wristを含む手根不安定症に対する様々な術式を見せていただき、技術的な視点とエビデンスの両面を学び、大変貴重な経験となりました。



Dr. Jeffrey Yaoと記念撮影



歓迎会でのプレゼンテーション風景

University of New Mexico (Albuquerque, New Mexico)

Host: Deana Mercer, MD

治安上の制約がある中での外傷対応が印象的でした。カークラッシュによる外傷性股関節脱臼が一晩で2例来たり、多発するgunshot injuryなど、米国ならではの救急現場を体験する貴重な機会となりました。また、我々の訪問に合わせて橈尺骨癒合症に対する分離授動術を予定していただき、日米の治療コンセプトの違いについて議論しながら手術を見学することができました。



Dr. Deana Mercerと記念撮影



カダバーワークショップを企画していただいた

79th ASSH Annual Meeting (Minneapolis, Minnesota)

学会中には、各国のtraveling fellowたちとの交流を目的としたBunnell Luncheonが開催され、同年代のフェローや著名な手外科医とのネットワーキングが実現し、国際的な視点で手外科を捉える重要性を実感しました。



各国のtraveling fellowと記念撮影

University of Michigan (Ann Arbor, Michigan) Host: Kevin Chung, MD

歴代のフェローが必ず訪れるというミシガン大学では、フェローだけでなく留学生も含めて、統制の取れたチーム医療の重要性を体感しました。「今日学んだことを3つ述べよ」という振り返りの場が設けられ、学びを深めることが出来ました。長時間の手術見学を通じ、米国特有の医療システムの利点と課題を知る貴重な機会となりました。



Dr. Kevin Chungとラボのメンバーとの集合写真

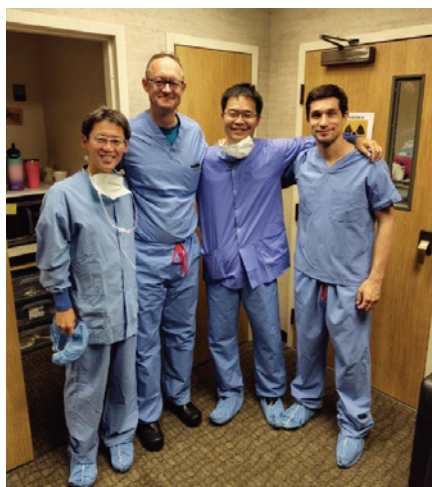
Indiana Hand to Shoulder Center (Indianapolis, Indiana)

Host: Thomas Kaplan, MD

多くの手外科フェローを受け入れており、日常よく見る手根管開放術や肘部管単純除圧術などが効率的に行われ、日本と米国の医療文化や教育スタイルの違いを実感しました。特に、医師や医療スタッフの明確な役割分担や、効率的な手術準備の仕組みは、今後の日本の良いロールモデルになると感じました。



Indiana Hand to Shoulder Centerのメンバーと



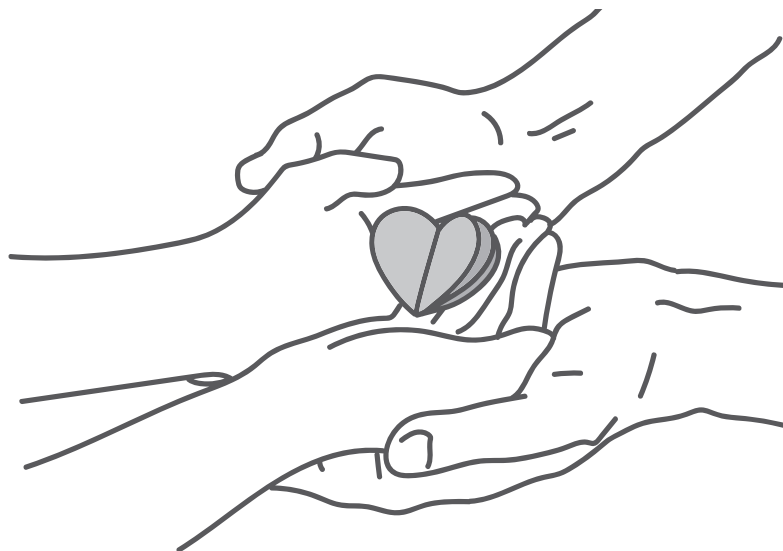
最終日の記念写真

さいごに

本プログラムを通じて、米国手外科の多様性を体感するとともに、異なる文化・医療制度の中で洗練された医療システムを直接肌で感じることができました。また、カンファレンスでの活発な議論やフェロー達の貪欲な姿勢からは、単に知識を得るだけでなく、それをアウトプットする訓練が日常的に行われていることが感じられ、あらためてアメリカ社会の競争の激しさを痛感しました。その一方で、日本の手外科学の強みを再認識する場面も多くあり、例えば、米国では医療の効率化が進んでいますが、個々の患者に応じたケアの細やかさにおいては、日本の手外科が持つ独自の強みを感じました。

また、米国内の施設だけでなく、ASSHでの世界各国のtraveling fellowたちとの交流を通じて、国際的な手外科の潮流を体感することができました。そして、1か月という長い時間と一緒に過ごしていただいた河村先生やDr. Gomezとは、異なる文化、今後のキャリア形成について語り合うことができました。同じ志を持つ同世代の医師と出会えたことは今回のフェローシップで得た大きな財産です。各先生方から大いに刺激を受け、私自身のさらなる研鑽の必要性を強く感じた旅となりました。

最後に、このような機会を与えていただきました国際委員会の先生方をはじめ、日本手外科学会会員の皆様、温かく迎えてくださった受け入れ施設の方々、快く送り出してくれた大阪大学手外科グループのメンバー、そして家族を含めサポートをいただいた全ての方々に深く感謝申し上げます。この経験をもとに、日本と世界をつなぐ架け橋となり、日本手外科学会のさらなる発展に寄与できるよう努めていきたいと思います。



JSSH-HKSSH Traveling Fellow報告記

大 西 正 展

市立東大阪医療センター 整形外科

この度、Asian-Exchange Travelling Fellowに選出していただき、令和6年3月23～28日に、香港を訪問させていただきましたので、この場を借りてご報告申し上げます。

2019年に1年間米国スタンフォード大学に留学する機会を得ました。米国留学を通じて、日本との類似点や相違点を体感し、日本での診療の強みや、現在の治療の問題点や改善点、今後の研究課題などを考える非常に良い経験となりました。海外に目を向けることに重要性を感じ、このTravelling Fellowにも応募させていただきました。審査は一次(書類選考)と二次(英語でプレゼンテーション)という形で、2023年12月下旬に学会から選出の連絡をいただきました。そこから訪問先が香港にすぐ決まり、2023年に香港に訪問された国際委員の吉田史郎先生からご連絡をいただき、application formなどの作成に取りかかりました。吉田先生には香港手の外科学会(以下HKSSH)の窓口となるEmily Yip先生との連絡も仲介していただき、さらに香港での訪問先やスケジュールの概要、ホテルの場所や移動手段などのアドバイスをいただき、本当に心強く感じました。同じく同年に香港に訪問された野口貴志先生からも、スケジュールや現地の情報を提供していただき、感謝申し上げます。

過去のJSSH-HKSSH Travelling fellow 報告記にもあるように、香港は新幹線、地下鉄、バスなどの公共交通機関が発達しており、空港から都市部や関連病院までの移動も比較的しやすい環境でした。到着初日の3/22は、ハンドセラピストと合同の宴会に参加し、HKSSHの一部のメンバーや各国のexchange ambassador(韓国、台湾、シンガポール、ロシア)の先生達と挨拶を交わしました。3/23～3/24は学会に参加しました。3/24は各国のExchange Ambassadorの発表があり、私の発表は橈骨遠位端骨折の掌側月状骨窩骨片の3DCT評価でした。学会会場は一部屋で小規模かつカジュアルな雰囲気でしたが、発表から質疑応答は全て英語で行われておりました。香港の先生同士でも、英語でcommunicationを取っておられました。その後の晩餐会では、中国からのinvited speakersとexchange ambassadorの先生達とテーブルを囲みました。このテーブルでは中国語が主言語となる時間が多く、香港、シンガポール、台湾の先生の語学力に驚きました。

3/25以降は関連病院見学となりました。訪問病院と担当していただいた先生、主な手術を記します。Duchess of Kent children's hospital で Margaret Fox先生のテニス肘の関節鏡手術、Tuen Mun HospitalでPT Chan先生、Emily Yip先生のもとで、屈筋腱縫合、鏡視下舟状骨偽関節手術、

肘頭骨折の固定術、Alice Ho Miu Ling Nethersole HospitalでJeffrey Koo先生のもとで内軟骨腫の鏡視下手術、鏡視下手根管開放術、Princes of Wales HospitalでWing Lim Tse先生とPC Ho先生のもとで鏡視下手根管開放術、鏡視下母指C M関節滑膜切除術、鏡視下橈骨茎状突起切除術を見学し、一部は手洗いをして助手もさせて頂きました。

どの病院に行っても、PC Ho先生の技術が全ての先生に受け継がれているようでした。PC Ho先生からは鏡視下TFCC関節包縫合のテクニックを手術場の薬液ボトルとガーゼと針、糸で再現して頂き、レクチャーしてもらいました。その他に印象に残ったことは、テニス肘の関節鏡手術で、上腕骨小頭の軟骨損傷部に術中採取した血液をすぐに遠心分離してPRPを注入したことでした。再生医療が保険適応でない日本とでは、大きな差を感じました。

毎日夕食をご用意していただき、沢山歓迎していただきました。特に最終日にはPC Ho先生と昼食から多くの時間を過ごせました。私が10年ほど前、初めてアメリカ手外科学会に参加した時に、IWIW (International Wrist Investigator Workshop) で欧米人の中で戦うアジア人として輝いていたPC Ho先生とこれほど近い距離で接することができたのも、非常に貴重な経験となりました。

各国のexchange ambassador達は、学会後はすぐ帰国する先生や、個人で観光したり、奥さんとDisney landに行ったりと、誰もこのような病院見学や交流のプログラムはありませんでした。日本から来た私だけが、このような濃密な経験ができました。日本と香港の手外科の先生方が、友好的な関係をこれまで築き上げてこられた賜物と考えます。また同世代の他国の手外科医と交流を持てたこと、香港の手外科の先生と友好的な関係を作れたことは、今後の人生において素晴らしい経験となりました。2024年は4月に奈良医大主催の手外科学会があり、HKSSHから選出されたMichelle Lee先生を大阪や奈良を案内できたことも、良い縁を感じました。

最後になりましたが、今回の応募において推薦いただきました奈良県立医科大学整形外科教室の田中康仁教授、手の外科学教室の面川庄平先生、勤務病院の宗本充部長に感謝申し上げます。また、日本手外科学会国際委員長の市原理司先生と国際委員の先生方には、このよう貴重な機会を与えて頂き、感謝申し上げます。ありがとうございました。



各国(韓国、シンガポール、ロシア、台湾)のexchange ambassadorの先生達(筆者は右から3番目)



PC Ho先生と留学中の中国手外科の先生達(筆者は右から2番目)

JSSH-KSSH Travelling Fellow報告記

有 光 小百合

独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 整形外科

2024年10月30日から11月6日までの8日間、Exchange Traveling Fellowとして韓国ソウルを訪問する機会をいただきましたので、ここに報告させていただきます。今回は2004年度韓国手外科学会への参加(写真1, 2)のほか、韓国を代表するwrist surgeonの4施設の訪問を希望しました。施設によっては手洗いまでさせていただくことができ、手術後はレクチャーやディスカッションの時間があり、充実した研修となりました。また学会では国際委員会委員長の多田薫先生の招待講演を拝聴し、その後も施設見学をともにさせていただけたことは、大変光栄でした。



写真1, 2: KSSH Travelling Fellow Sessionでの15分スピーチ香港、台湾、日本(右より順)のフェロー達へ感謝状贈呈



写真3: Precongress Dineerにて。2004年KSSH フェローのProf. Lee(右から2番目)、多田薫国際委員会委員長(中央)、KSSH committeeのPfor. Kan(左から2番目)と2022年KSSHフェローのProf. Park(左から3番目)

施設訪問にあたってはKSSH CommitteeメンバーのDr. Jun-Ku Lee、2024年度のKSSHのフェローであるProf. Jae Sung Lee、2022年のフェローであるProf. Il Jung Parkが計画から実行まで、本当にきめ細やかにお世話くださり心より感謝申し上げます。(写真3)

1. SUMSUNG Hospital

Prof. Min Jong Park(写真4)の肘のLCL再建、4-5のICRSAを用いたキーンベック3Bに対する血管柄付骨移植の手洗いをさせていただきました。LCL再建における骨孔の正確な位置決め、張力の決定法など詳しく解説下さいました。

2. Chung-Ang University

Prof. Jae Sung Leeは(写真3) TFCC再建をone tunnelで、中村俊康先生のデバイスを用いて行っていました。非常にスピーディーな手術で驚きました。

3. Eunpyeong St. Mary's Hospital

中村俊康先生はじめ多くの先生が推薦してくださったProf. Joo Yup Lee (写真5) は6Uとdirect foveaポータルを一度切で開け掌側アプローチで行うTFCC修復術と、Midcarpal instabilityやSLDに対してscapho-triquetrumをtighteningしてDICを強化する鏡視下手術をみせてくださいました。術後舟状骨は側面像ではっきりと分かる程度に術前より回外背屈し、アライメントが改善していました。全症例でRCJとMCJを鏡視して評価し、状態に応じてDIC強化とTFCC修復を行っていました。Hook plateを用いてdiaphyseal osteotomyとTFCC修復を同時に行う症例も見せていただきました。術後は1時間以上もバイオメカニクスの視点に基づいた診断と治療方針について、詳しく解説してくださいました。

4. Korea University

藤尾圭司先生にご紹介いただいたProf. Jong-Woong Park (写真6) はTFCC修復、母指MCL再建、舟状骨骨折とTFCC修復例、endoscopic CTRと多彩な手術をみせてくださいました。TFCC修復においてTransosseousの骨孔径は3.5mmと大きくソウルでも是非があるようでしたが、デブリの範囲が大きくよりhealingを促せる、自由度があるのでどの領域の損傷でも修復可能で再建は必要ないとの見解でした。Park先生は60例を検討され、茎状突起先端から12mm、骨軸と37度の方向、目標は茎状突起基部から橈側に4mm(橈尺側幅の1/3) がベストだと教えて下さいました。

また、例年のフェローの先生方から伺っていた以上に、施設への送迎を始め昼と夜の会食と、毎日これ以上ないおもてなしをいただきました。大変恵まれた経験をさせていただいたことに心より感謝し、今後この素晴らしい日韓交流の継続と発展に尽力する責務をひしひしと感じた次第です。

最後にこのような素晴らしい機会を与えてくださいました2024年度岩崎倫政理事長、池上博泰担当理事、市原理司国際委員会委員長、そして国際委員会の先生方に心より感謝申し上げます。また今回このtravelling fellowの応募に背中を押してくださいました原友紀理事に感謝申し上げます。そして、この魅力的なwrist surgeryに携わることができるまでに指導してくださいました森友寿夫先生、村瀬剛先生、正富隆先生に、この場をかりて厚くお礼申し上げます。

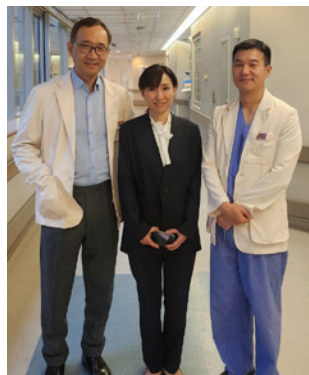


写真4:SUMSUNG HospitalにてProf. Park(左)とProf. Shim(右)



写真5:Eunpyeong St. Mary's HospitalにてProf. Lee(右後方)と一緒に見学したフェロー達



写真6:Korea University Anam HospitalにてProf. Park(中央)と

JSSH-TSSH Traveling Fellow報告記

中 島 祐 子

中国労災病院整形外科

2024年4月30日から12日間、日本手外科学会のTraveling fellowとして台湾に訪問し、台北の国立台湾大学、高雄の台湾手外科学会、義大病院、台南の大東門讃診所と国立成功大学で多くの台湾の先生達と交流させていただきました。

国立台湾大学では、私が2022年の日本整形外科超音波学会にお招きしたPM&RのKe-Vin Chang先生の超音波診断と超音波ガイド下注射を見学しましたが、プロロセラピー（15%ブドウ糖注射）の数の多さと素早さに圧倒され、さらに常に目の前の臨床を論文化する視点に感銘を受けました。

続いて、日本の新幹線にそっくり（個人的にはイメージカラーがオレンジで大好き）な台湾高鉄に乗って、台湾手外科学会に参加するため高雄に向かいました。学会ではTraveling Fellow Sessionで韓国・香港のFellowとともに登壇し、「前骨間神経麻痺における砂時計様くびれの超音波診断」について発表しました。質疑応答はとても緊張しましたが、日手会から多くの先生が招待されており、顔が見えることでとても心強く感じました。学会は日手会より小規模ながら、参加者同士の距離が近く、市内観光や懇親会などイベントが目白押しで、非常に密な交流ができました。

義大病院ではTu先生が率いる多くの先生と出会い、病院・手術見学をさせてもらいました。腕神経叢麻痺に対するContra C7のような大きな手術でも、若手医師が壁に手術計画を書き記して主導し、Tu先生に指導を受けつつ精密・正確な神経展開を行う姿が印象的でした。Morning Conferenceでの発表後には、超音波診断や治療についてのお考えをいただき、学びの多い時間となりました。



台湾手外科学会にて



台湾手外科学会懇親会



義大病院 (E-Da Hospital) にて

大東門讃診所では、台湾で超音波ガイド下手術を積極的に行っている国立成功大学の元教授であるJou先生の超音波ガイド下手根管開放術と腱鞘切開術を見学しました。シンプルな手技ながら安全性が高く、日本に持ち帰れる技術として大変勉強になりました。

国立成功大学では、Morning Conferenceにて講演させていただき、Wu教授と手外科領域での超音波の可能性について意見交換しました。

今回のTraveling Fellowでは、多くの先生達と交流し、貴重な経験を積むことができました。国を越えても、迷ったり悩んだりすることは同じであり、意見を交わすことで、より深い理解につながることを実感しました。連日の最高級の温かいおもてなしにも心から感謝しています。思いやりや人の温かさは世界共通であり、私自身も今後、海外からのFellowをもっと暖かく迎えたいと思いました。当初はTraveling Fellowへの応募をためらっていましたが、年齢的にはラストチャンスで挑戦して本当に良かったです。海外に友人がいることはとても楽しく、学びの刺激にもなります。後輩たちにもぜひ準備をして挑戦してほしいと強く感じました。今後も国際的な交流を続け、自分自身の成長はもちろん、日本手外科学会にも貢献できるよう活動していきたいと思います。

最後に、今回の応募にあたり、推薦いただきました砂川融先生、安達伸生先生、そして背中を押してくれた四宮陸雄先生、兒玉祥先生に心から感謝いたします。また、このような素晴らしい機会を与えてくださった日手会理事の先生方、国際委員会の先生方をはじめ、赴任直後であったにもかかわらず快く送り出してくださった中国労災病院の先生方、協力してくれた家族を含め、ご支援くださったすべての方々に心より感謝申し上げます。



大東門讃診所にて

手外科バトンリレー (第 14 回)

Standing on the Shoulders of Giants

1287/1200

金 谷 文 則

積発堂富永草野病院 理事長／琉球大学名誉教授

「Standing on the Shoulders of Giants」先人の積み重ねた発見に基づいて何かを発見することを指す。アイザック・ニュートンが1676年にロバート・フックに宛てた書簡の一節「私がかなたを見渡せたのだとしたら、それは巨人の肩の上に立っていたからです。If I have seen further it is by standing on y^e shoulders of Giants.」で知られるようになった (Wikipediaより)。私達が数十年前に比べて優れた医療を行えるのは、先賢が積み上げた知識と手技の進歩のおかげであり、私達は知識をさらに積み上げ、手技を発展改良し次世代につなげてゆく義務があると考えています。

24歳で医師になり、先輩方に追いつこうと一生懸命勉強しました。今から考えれば恥ずかしいほどの思い上がりですが、1984年頃には一通りの整形外科手術ができるようになったと錯覚し、何か新しいこと、当時の言葉で言えばドイツ語でneues (ノイエス)、英語でsomething newを医学に加えたいと思い研究を始めました。学位取得後にLouisvilleに留学し、約3年後に帰国しました。縁があって琉球大学に就職し28年間 (うち19年間教授)、研究、後輩の指導、学生の教育そして手技の改善に努めてきました。

私の手の外科の師匠は故田島達也名誉教授をはじめとする新潟手の外科班の諸先生とLouisvilleのKleinert先生とTsai先生です (図1、2)。加えて故津下健也名誉教授の「私の手の外科」と“Green's



故田島達也名誉教授
(1994～2003)



斎藤英彦先生



新潟手の外科研究所 吉津孝衛先生

写真1 新潟での指導者

Text book of Hand Surgery”で勉強しました。多くの偉大な先輩方と国内の同輩から学んだ知識と手技を吸収・応用し若手のHand surgeonsに、より遠くの地平を見られるようにすることが私の使命と考え、国内・国外へ手術・講演に訪れました。その他、「新潟手の外科セミナー」の講師を30年以上、AO役員を21年間務め、知識や技術の伝承に務めてきました。

2019年の定年を一区切りとし、沖縄リハビリテーション福祉学院に学院長として勤務しセカンドステージをスタートしました。約10kmの下り坂を太平洋に向かって自転車通勤し、帰路はかなりの登坂でしたが、夜の会議やミーティングもなく、週1.5日手術と外来診療を行う快適な生活を過ごしました。コロナ対策に苦労しましたが、若い学生に教えるのも新鮮でした。

2021年、元気なうちに原点に戻ってもう少し手の外科の臨床に携わりたいと考えて新潟県三条市の富永草野病院に理事長として赴任しました。一般病床100床の整形外科病院で専門医は10名(整形外科9名、形成外科1名)、2023年の手術数は2100件、私の執刀は216件で手・肘の外傷と再建を主に行っており、私のライフワークである先天性橈尺骨癒合症の授動術も年に3～4件、当院または出張して行っています。



Harold Kleinert (1921-2013)



Tsu-Min Tsai

Thomas Wolff

写真2 Mentors in Louisville

2023年Singaporeで開催されたアジアパシフィック手外科連合 (APFSSH) の総会で次期会長に選出されました。現在APFSSHの前会長Raja Sabapathy (India)、現会長Anthony Berger (Australia)そして次期会長の私は1989年のLouisville fellow 同期生でありこの僥倖を喜んでいます。なお写真のDaniel Nagleは国際手外科学会連合 (IFSSH) 会長でLouisville fellowです (写真3)。

今年のIFSSH学術集会 (Washington, 2025/3/24～28) ではPioneers of Hand Surgeryに日本から5名選出され、その中に私も含めていただきました。また2025年9月からはAPFSSHの会長に就任予定であり忙しくなりそうです。

さて、私の手の外科がどこまで到達したかですが、「新手一生」で有名な升田幸三実力制第四代名人の名言「たどり来て、未だ山麓」に同感です。



Daniel Nagle
IFSSH president

筆者
President-elect

Anthony Berger
APFSSH President

Raja Sabapathy
Past President

写真3 Louisville fellows at 13th APFSSH 31st May-3rd June 2023 Singapore



説明・同意はどこまで必要か

若 林 良 明

横浜市立みなと赤十字病院 整形外科

前号、私の担当初回では、同意取得が困難な患者の手術に際しての注意点を述べた。今回は手術に限らず、説明と同意取得が必要となる対象や内容について、考えてみたい。

説明・同意を必要とする検査・治療・手術は、医学・医療の発展や社会情勢とともに変化する。当院では院内各科から説明・同意を必要とする行為のリストを集め、年1回更新して院内に周知している。手外科領域では手術の他、関節造影を対象としているが、骨折や関節脱臼、肘内障の整復などは現在のところ対象とはしていない。かつて行われたデュプイトラン拘縮に対する酵素注射療法も対象であったが、販売終了を受けて対象からは消去した。

手術後の経過不良や合併症発症の一因として、患者の個別リスク（出血傾向や免疫抑制状態など）が関与することがあるが、係争に至った場合に、その個別リスクを医療者側が術前から認識して対処していたかどうかが問われることがある。例えば手外科医にとって過去の同一部位の手術歴があれば、癒痕化により神経・血管損傷のリスクが相対的に高まることや、糖尿病であれば感染リスクが高いことは「当たり前」のことであるが、手術に際してそのリスクを術前から認識していたことを、後日文書で示すことができるようにしておくことが望ましい。当院の全科共通の説明書書式では患者の個別リスクとして出血傾向、免疫抑制状態、耐糖能異常、低栄養状態、肥満や解剖学的異常、過去の同一部位の治療・手術歴などをチェックボックスにマークすることで、こちらがそれを認識した上で対応・手術したことを後日に証明できる別紙を、必要時に運用できるように設けている。

麻酔科医師が介入しない、診療科医師による伝達麻酔・局所麻酔で麻酔同意書を別にとるケースは少ないと考えられるが、手術説明の中で麻酔の方法と合併症については言及する必要がある。2020年12月からエビネフリン入りリドカインが指手術の麻酔に「慎重投与」にて行えるようになり、WALANT手術が盛んに行われるようになった。阻血症状の合併症の報告は少ないが会議録としては報告が散見されるため、リスクとその対処について事前説明は必要と考えられる。

話は少し変わり、手外科では対象患者が少ないかもしれないが、2024年の診療報酬改定にて身体的拘束を最小化する取組の強化として遵守すべき基準が強化され、それを満たしていない保険医療機関は入院基本料が1日40点減算されるという罰則規定が盛り込まれ、2025年6月からの適用開始を前に運用ルール等を整備している病院も多いことと考えられる。当院では運用変更の一環として身体的拘束に関する説明・同意書書式を見直し、拘束しないことによるリスクと、拘束を行うリスクの双方を説明し、患者または家族に必要時に拘束を「希望する」「希望しない」の2つのチェックボックスを設けて選択していただき、希望しない場合は身体的拘束不同意書として扱うことを検討している。本改定は加算（アメ）ではなく、減算（ムチ）によるかなり強引な行政誘導で、人権への配慮が行き過ぎて不穏時のリスクや、転倒・転落などによる訴訟リスクの増大が懸念されるところである。

Joy の声 (第 11 回)

大 田 智 美

宮崎大学 医学部 整形外科

私は県外の大学を卒業し、地元の宮崎大学整形外科に入局しました。地方における手外科医・女性医師としての経験をお話したいと思います。

① 地方における手外科医

元々縫合が好きで、3年目にマイクロサージャリーをされる先輩の下で再接着の助手をする機会をいただきました。骨接合はあっという間に終わり、神経・血管・腱・皮膚をひたすら縫合する手術が楽しく、手外科医を目指すようになりました。

地方大学は人員不足で、必ずしも希望分野を目指せるわけではない状況でしたので、手外科分野の学会発表、論文作成、手術などひたすらアピールし、ようやく大学の手外科グループに配属されました。文献を読み手術見学に行っては、高難度や新しい手術など多くの種類の手術をしました。体力・機動力のある10年目頃までにたくさんの手術をしたことが、現在の糧になっています。さらに宮崎は上肢外科医が不足していたこと、スポーツ整形が盛んであったことから、手外科手術に加え、上肢医として悪性腫瘍や人工肘関節、人工肩関節・腱板手術の助手、少年野球肘検診、プロスポーツ選手の手・肘の手術と多様な診療をさせていただいています。私は野球はあまり観ないのですが、私が手術した選手が甲子園で活躍している姿には感動を覚えました。とても多忙ですが、地方ならではの経験であり、診療の幅が広がる素晴らしいチャンスをいただいています。

② ロールモデルの先輩の存在

30代半ばに結婚、2児の出産を経て、復帰後に手外科専門医を取得しました。当時は女性医師の育休が確立しておらず、女性医師の先輩方は産休のみで復帰、もしくは出産を機に退局されていました。キャリア中断への不安を感じ育休をとることを迷っていた時、2年先輩の山口奈美先生が「人生はみんな100点しか持ってない。男性医師は一生仕事に100点かもしれないけど、私たちは仕事が50点の時期があってもいいんじゃない？無理して120点取らなくてもいいんだよ。(子供が小さい) 今だけだから。」と言ってくれました。山口先生はなでしこジャパンの帯同ドクターで、2人の子育てをしながら海外遠征に行ったりするバリバリのスポーツドクターです。そんな先輩からのアドバイスは説得力があり、120点取らなくていいという言葉は私をものすごく軽くしてくれました。実際、十分な育休が取得でき、子供の年齢に合わせて仕事量、当直も調整していただき、現在

まで家庭と仕事の両立ができています。ロールモデルとなる先輩の存在は大きく、私も育児中の後輩たちと積極的にコミュニケーションを取るように心がけています。

育児をしているとキャリア形成へのモチベーションを保つことが難しいことがあります。これまで手外科専門医、高難度手術、研究、論文など一つずつ目標を設定することで、モチベーションを保つことができました。これからも宮崎の手外科患者さんを支え、手外科医を目指す後進の先生方の助けになればと思っています。



スポーツグループ山口奈美先生(左)と筆者(右)



令和6年10月に新教授に就任された亀井直輔教授と医局のみなさん(ヘリポートにて)

組織再生型小口径人工血管の開発

山 中 浩 気

京都大学大学院医学研究科形成外科学

下肢動脈バイパスなど血管外科の発展に伴い小口径代用血管の需要は20世紀後半から急増したが、既存の非吸収性合成材料からなる人工血管は内径4mm以下では満足な開存が得られないためその用途は限定的で、例えば膝窩以遠のバイパスは未だ自家静脈グラフトに頼らざるを得ない。1986年にWeinberg & Bellが世界初の組織工学的人工血管 (Tissue-engineered vascular graft, TEVG) を報告して以降、組織工学は人工血管の小口径化を達成可能な手段として期待され、多種多様の細胞・成長因子・足場材料が研究されてきたが、これまでに臨床応用に至ったTEVGはいずれも内径6mm以上のものばかりで、移植先で患者自身の血管に置換される可能性があるという利点こそあれ、末梢の小口径動脈再建という臨床需要を満たすことはできていない。

我々は、内径4mm未満の動脈ロングバイパスに適応可能な小口径TEVGを世界で初めて実用化することを目的に、国立循環器病研究センター研究所、株式会社ジェイ・エム・エスと共同で異種脱細胞化血管の研究を進めてきた。その開発戦略は、①目的とするサイズにマッチした異種血管(ダチョウ頸動脈、内径2.5~3.5mm・長さ30cm以上)を材料とすること、②脱細胞化には再細胞化に不利となる界面活性剤を使用せず、細胞外マトリックスの損傷が少ない超高静水压を用いること、③脱細胞化血管の内腔に血管内皮前駆細胞に特異的なペプチドを固定化して移植後の内皮形成を促進すること、である。プロトタイプを用いた大動物への移植実験では、優れた抗血栓性と移植後の迅速な内皮様組織再形成により非常に安定した初期開存が得られており、1年以上の長期開存例では、脱細胞化血管由来のマトリックスの大部分が残存しているものの、自家細胞による自己血管化が進行していることも確認できた。

臨床化にあたっての障壁は、脱細胞化組織の生物学的安全性について具体的な評価項目が定められていないことと、医療機器としての脱細胞化組織の滅菌方法が確立していないことであった。前者についてはISO10993に準拠した評価を実施し、抽出液を用いたin vitro評価法は生体組織由来材料に不適合な場合があることを突き止め、適切な評価システムやin vivo評価法の有用性を示してきた。滅菌方法については、一般的に用いられる20kGy以上の電子線滅菌が脱細胞化血管の物性に与える僅かな変化であっても開存性が低下することが問題となった。また、脱細胞化血管内腔に固定化したペプチドが電子線によって効力を失う可能性も懸念された。脱細胞化に用いる高静水压処理に一定の滅菌効果があることから滅菌線量は低減可能であること、乾燥状態の脱細胞化血管への電子線照射では物性が更に変化しにくいこと、ペプチドは滅菌済み製品の使用前に単純な処理で固定化することなど様々な改良を検討しており、ようやく初の臨床使用が現実味を帯びてきたと感じている。

物故会員への追悼文

阿部正隆先生のご逝去を悼んで

室岡整形外科記念病院、栃内第二病院 古 町 克 郎

恩師、岩手医科大学整形外科名誉教授はご家族に囲まれ2024年10月に92歳でご逝去されました。手の外科の確立と周知に貢献された第一人者で手外科学会の誇りであり非常に残念です。最後にお目にかかったのは昨年、香港大学SP Chow名誉教授ご夫妻が盛岡に来訪された時でした。エジンバラのLamb教授のところに留学中に知り合った親友であるご夫妻と、お元気に久闊を叙されていたように見えました。御達者な姿を拝見したあと、療養中と伺って間もなくの訃報に驚きを禁じ得ません。

薫陶を受けた者の1人として、そのお人柄と足跡に触れさせて頂きます。阿部正隆先生は講師時代には新潟大学田島達也教授のもとで手外科の研鑽を積み、岩手県では初の切斷指再接着に成功してメディアにも紹介され、医局員や留学生にも恵まれました。岩手医科大学整形外科教授、付属病院副院長として東日本手外科研究会会長、日本手外科学会会長、東日本整形災害外科学会会長を歴任され、退職後も療養の直前まで外来診療や国民健康保険診査会長として地域医療や後進の指導に励まれていました。盛岡の東日本整形災害学会ではDB Roos教授やJCY Leon教授とRoos testの肢位で記念撮影したのが昨日のこのことです。我々が師より学んだ多くのなかで最も大きいことは「思い通りに行かないときの経験を大切にすること」ということです。それがクリニカルクエストでありブレイクスルーの源だからです。肘部管症候群では再発例を含み多数の症例の詳細な検討が当時の考え方に大きく影響しました。胸郭出口症候群の肋骨切除では早くから鏡視下手術を導入されていました。阿部先生の手術は迷いなく明快で侵襲小さく、ゆえに成績も素晴らしいものでした。温厚な人柄は大学の内外で有名でした。IFSSHで山内裕雄教授（順天堂大学）、三浦隆行教授（名古屋大学）、二見俊郎教授（北里大学）とともにパリを訪れたときは、奥様とともに不慣れた医局員一同を気遣ってくださいました。

師は温厚篤実の人格者である一方でたいへん多趣味な方でした。岩手は川釣りの名所が多いということもありますが、四輪駆動の愛車にはつねに川釣り道具一式がスタンバイしており、移動の途中でも第六感が働いたときには立ち寄って釣り竿を垂らすほどでした。医師会報に寄稿した釣りと手術の工夫に関する随筆には一同膝を打ちました。乗馬部の顧問として指導にあたる傍らゴルフ部では部長として学生にも人気がありました。プレイスタイルは紳士そのもので、ナイスショットをしてもミスショットをしても感情を表に出さず寡黙にプレイされていました。教授になられてから始めたゴルフでしたが同門会ゴルフのリーダー的存在でした。スキーの腕前も非凡で小生を含めて不肖の弟子達が追いつけなかったほどです。パソコンも早い時期からほぼ趣味のように自ら操られておりました。

そんな阿部先生の主催する教室のモットーは「よく遊びよく学べ」でした。阿部先生の人間としての幅広さのおかげで多くの医局員そして多くの手外科の後継者が生まれました。現在活躍中の東京医大整形外科西田淳教授、岩手医大医学教育田島克巳教授、岩手医大整形外科佐藤光太郎講師ら枚挙に暇がありません。

やる気を引き出す阿部先生より頂いた詩です。

"Not knowing when the Dawn will come, I open every Door."

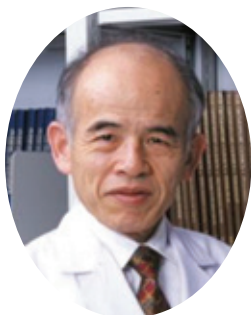
(夜明けはいつ訪れるか分からない、すべての扉を開けておこう。1893 Emily Dickinson 同名の詩集)。

「静かにやるべき事を確実にすすめる」という阿部先生のフィロソフィーをどれだけ学べたか自信がありません。先生のお写真の前に立った時は「迷わずにこのまま続ければいいんだよ。」と言ってくれている気がしました。温かい恩師の志を受け継いでまた伝えて参る所存です。阿部先生、本当にありがとうございました。安らかなご永眠を心よりお祈り致します。



山野慶樹名誉会員を偲んで

理事 五 谷 寛 之



日本手外科学会名誉会員であられました山野慶樹大阪公立大学名誉教授におかれましては令和6年7月18日にご逝去されました。会員の皆様にあらためてご報告させていただきますとともに先生のご功績と思い出を大阪公立大学整形外科学教室同門を代表して紹介させて頂きたいと思ひます。

先生は1936年に香川県にお生まれになり、1962年に大阪市立大学医学部をご卒業され、1970年にはドイツ、スイス、オーストリアで研修を受けられています。1974～5年にかけてJapan International Cooperation Agency (JICA) のプログラムでアフガニスタンに赴任され、その後1987年には川崎医科大学整形外科学科外傷学教授、1993年には大阪市立大学大学院医学研究科整形外科学教授に、2002年には名誉教授に就任しております。

手外科医の先生方が先生に関して、まず思い浮かべるのは、先生がネーミングされた“Ultramicrosurgery”を駆使した指尖部再接着であろうと思います。すなわち今までのマイクロの1mm径の血管吻合から、現在の器材を用いれば100 μ 径の小血管吻合（ウルトラマイクロ）ができるということを臨床で実証されました。

また、私たち同門は常々このように指導を受けてまいりました。それは“20世紀後半、Jacobsonの1mm径の血管吻合の実験的成功の報告から大きく発展したマイクロサージャリーは、単にマイクロサージャンだけのものではなく、広く外科医に普及すべき手技である。百聞は一見にしかずで、この手技を経験すれば、愛護的組織の取り扱いなど手技的な面だけでなく、手術に対する考え方も広く柔軟になり、より繊細な手術が可能になる。さらに、これまで不可能であった手術が可能となる。外科医は、すべからくこの手技を習得すべきと考える。”との信念に基づくお言葉でありました。

四肢外傷全体へのマイクロサージャリー手技の応用に加えて、Ilizarov法にも大変造詣が深く、その導入にも積極的で“四肢外傷の再建にはマイクロサージャリーと骨軟部組織延長手技の融合が重要であり、片方に秀でた先生はたくさんおられるが両方に秀でた先生は数少ない。これからの整形外科医は両方の手技をマスターすることが不可欠である。”と常に指導されてきました。

これらの技術をベースに世界で初めて血管柄付き腓骨移植手術による下顎再建を行われた御業績があり、脊椎外科領域においては椎間固定に血管柄付き肋骨移植術を適用され、また股関節外科領域では大腿骨頭壊死に血管柄付き腸骨、腓骨移植術を応用されてきました。まさに手外科から脊椎、四肢再建までをこなす超人的な外科医であり私達同門の永遠の目標であります。

そのベースには“整形外科治療は骨折に始まり骨折に終わる”というお考えがあります。また、海外からの留学生の教育にも大変熱心に取り組まれてきました。特筆すべきはご自身がアフガニスタンの現地で医師指導、診療に従事され、またJICAのプログラムで10年間にわたりアフガニスタンからの留学生を大阪公立大学(旧市立大学)整形外科大学院や関連病院で指導され、学位を授与されたことが挙げられます。郷に入れば郷に従えがモットーでもあり、アフガンでは現地の料理を現地のマナーで、召し上がられ現地に溶け込んでおられました。

意外にも、先生は野球部出身で、教授時代は大学の野球チームの部長も務められてきました。左利きで当時左利き用の用具は高価で確保に苦労されたこともあったようです。しかし、学生時代左投げが珍しく、真夏の暑い時期にバッティングピッチャーを延々と続けたことが後に外科医としての長時間手術に耐える忍耐力を鍛えるのに役立ったとのお話を伺ったこともあります。

先生は日本手外科学会、日本マイクロサージャリー学会、日本創外固定・骨延長学会、中部日本整形外科災害外科学会、日本骨折治療学会、中部日本手外科研究会、日本臨床バイオメカニクス学会会長、や多数の学会理事、幹事を歴任されました。様々な分野に足跡を残された先生のご冥福を会員の皆様方と共に謹んでお祈りさせていただきます(合掌)。



薄井正道先生を偲んで

済生会小樽病院 和田 卓 郎

薄井正道先生が、令和6年5月23日、静かに旅立たれました。薄井先生は、日本の手外科、マイクロサージャリー、骨軟部腫瘍外科の発展、そして、札幌医大整形外科学教室の発展に大きく寄与されました。札幌医大で薄井先生の薫陶を受けた者の一人として、僭越ながら先生のご業績とお人柄をふりかえてみたいと思います。

薄井先生は、昭和43年に北海道大学をご卒業、北海道大学整形外科で講師をお勤めになり、昭和59年11月に石井清一教授が主宰する札幌医大整形外科に助教授として赴任されました。北大時代、薄井先生は奈良医大の玉井進教授のもとでマイクロサージャリーを学ばれ、北海道で第1例目の切斷指再接着を成功させました。薄井先生は手外科医として活躍される一方、札幌医大にマイクロサージャリーを導入されました。術者として活躍されたのみならず、我々教室員の教育に情熱を注がれました。診療終了後の夜遅くまで、動物実験室で顕微鏡下のラットの血管縫合を手取り足取り指導してくださったことを思い出します。薄井先生の前でラット血管縫合に成功して初めて人の縫合が許されました。

薄井先生は、マイクロサージャリーを骨軟部腫瘍切除後の再建に応用しました。特に血管柄付き腓骨を用いた上腕骨近位部再建(sling procedure)は国際的にも先駆的な取り組みとして高く評価されました。薄井先生は「腫瘍切除と再建は同一の術者が行うべき」という信念をお持ちでした。朝9時から始まった手術が翌朝を迎えることもよくありました。へとへとになった助手の我々に、「また朝になりましたね。わっはっはっはっは！」と高笑いされる薄井先生の姿が今も目に浮かびます。先生のマイクロサージャリーに関する研究、臨床、教育の実績は高く評価され、平成4年、第19回日本マイクロサージャリー学会学術集会を主催されました。Toe to finger transferの権威である台湾のFu-Chang-Wei先生をはじめとする錚々たる海外ゲストをお招きし、学会は成功裏に幕を閉じました。

石井清一教授在任中の教室づくりと発展は、薄井先生なしには成し得なかったと思います。毎週行われるA、B、C各チームのカンファレンスや学会の予行演習のすべてに、薄井先生は石井先生と共に必ず参加されました。専門性にかかわらず、熱意と迫力をもって、時に厳しく我々を指導してくださったことを心から感謝しています。「熱意と迫力」こそが、私たち弟子が敬愛してやまない薄井先生の最大の魅力でした。

薄井先生は平成11年に札幌医大を退職され、東北北海道病院と羊ヶ丘病院の院長として地域医療、後進の育成に尽力されました。晩年はご病気をされ、お会いできなかったことが残念です。しかし私自身、仕事で辛い思いをして疲弊したときに、薄井先生の高笑いを思い出しては、元気を取り戻しておりました。先生が私たちに注いでくださったご指導と、数々の偉業に心より感謝申し上げます。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。合掌。

田中清介先生のご逝去を悼んで

近畿大学整形外科教授 柿 木 良 介

先生のご逝去の報に接し、心より哀悼の意を表します。またご家族ご親族様にも謹んでお悔やみ申し上げます。

先生は昭和30年京都大学をご卒業になり、整形外科教室に入局されました。同学年には、京都大学名誉教授で当教室の初代教授をお務めいただいた山室隆夫先生、京都市民病院名誉院長の森英吾先生がおられ、田中先生を加えた御三人は「京大30卒の整形外科三羽がらす」として、京大ではいまだに語り継がれています。

先生は長年京都大学整形外科でご勤務されたのち、昭和53年当教室の第2代整形外科教授にご就任されました。教室に、関節、脊椎、腫瘍、上肢、外傷の各分野の基礎をお作りになり、沢山の学生、医師に整形外科を教え、多数の入局者に学位論文を授け、さらに近畿大学関連病院を整備されました。教室外の活動としては、第9回日本整形外科学会基礎学術集会、第34回日本リウマチ学会、第25回日本リウマチ関節外科学会、第24回日本人工関節研究会、第6回日本軟骨代謝学会など多くの学会、研究会を主催され、また多くの学会の理事、役員を務められました。日本手外科学会の発展にも多大な貢献をされ、教室にも優秀な手外科医を育成されました。平成8年には日本手外科学会より特別会員の栄誉をお受けになっておられます。

私が2014年に京都大学から近畿大学に移った年の同門会でお会いした時、「よくきてくれました。頑張って近畿大学の手外科を盛り上げてください」と仰って握手していただきました。あの時の先生の手の温もりを今でもはっきりと覚えております。

先生のご逝去は、先生がその礎を作られた近畿大学手外科学を担当させていただいたものとして寂しい限りです。

田中先生、本当にありがとうございました。先生の長年にわたる医学、当教室の発展へのご貢献、ご尽力に深く感謝いたします。どうぞ安らかにやすみください。

令和6年11月

故 田中清介先生 御略歴

(学歴)

昭和26年 3月31日	大阪医科大学予科卒業
昭和30年 3月31日	京都大学医学部医学科卒業
昭和35年 3月31日	京都大学大学院医学研究科博士課程終了

(職歴・本務)

昭和35年 4月1日	国立京都病院医員(昭和38年2月15日まで)
昭和38年 2月16日	京都大学医学部助手(昭和44年1月31日まで)
昭和52年12月31日	辞職を承認する
昭和53年 1月1日	近畿大学医学部教授(平成12年3月31日まで)



平成12年4月1日	近畿大学名誉教授
(職歴・兼任)	
昭和53年1月1日	近畿大学医学部附属病院整形外科部長(平成12年3月31日まで)
昭和53年1月1日	近畿大学医学部附属病院理学療法部長(平成9年3月31日まで)
平成4年10月1日	近畿大学医学部附属病院副病院長(平成9年3月31日まで)
平成6年10月1日	近畿大学医学部附属病院救命救急センター本部長(平成9年3月31日まで)
平成9年4月1日	近畿大学医学部長(平成11年3月31日まで)
平成11年4月1日	近畿大学ライフサイエンス研究所教授(平成12年3月31日まで)
(学会歴)	
(国内)	
平成3年4月19日	日本整形外科学会理事(平成5年4月8日まで)
平成5年10月9日	日本整形外科学会基礎学術集会第9回会長(平成6年10月8日まで)
平成11年4月11日	日本整形外科学会名誉会員
平成元年5月28日	日本リウマチ学会第34回会長(平成2年5月31日まで)
平成8年5月26日	日本リウマチ学会幹事(平成11年5月26日まで)
平成13年5月16日	日本リウマチ学会名誉会員
昭和59年11月30日	日本股関節学会幹事(平成5年11月3日まで)
平成2年11月10日	日本股関節学会第18回会長(平成3年11月9日まで)
平成5年11月4日	日本股関節学会理事(平成8年11月4日まで)
昭和51年1月18日	日本人工関節研究会理事(平成10年3月5日まで)
平成5年2月6日	日本人工関節研究会第24回会長(平成6年1月29日まで)
平成10年3月6日	日本人工関節学会名誉会員 (日本人工関節研究会は、平成8年2月2日に日本人工関節学会に名称変更)
平成4年3月1日	日本軟骨代謝研究会第6回会長(平成5年2月27日まで)
平成7年3月3日	日本軟骨代謝学会理事(平成10年3月14日まで) (日本軟骨代謝研究会は、平成7年3月3日に日本軟骨代謝学会に名称変更)
昭和62年6月20日	関西リウマチ学会理事(平成5年3月4日まで)
平成5年3月5日	日本臨床リウマチ学会理事長(平成9年12月3日まで)
平成12年12月4日	日本臨床リウマチ学会名誉会員 (関西リウマチ学会は、平成6年3月4日に臨床リウマチ学会に名称変更) (臨床リウマチ学会は、平成6年11月16日に日本臨床リウマチ学会に名称変更)
平成7年10月26日	日本リウマチ・関節外科学会理事(平成12年10月20日まで)
平成8年10月13日	日本リウマチ・関節外科学会第25回会長(平成9年10月4日まで)
平成12年10月21日	日本リウマチ関節外科学会名誉会員 (日本リウマチ・関節外科学会は、平成19年11月8日に日本関節病学会に名称変更)
平成8年5月10日	日本手の外科学会特別会員
平成9年11月20日	日本炎症学会功労会員
(海外)	
平成3年10月	日中人工 関節フォーラム会長(北京)
平成6年10月8日	国際関節症シンポジウム会長(神戸)
平成8年7月	日米人工関節フォーラム会長(ハワイ)
(賞罰)	
昭和52年12月	関節疾患基礎研究奨励賞(上原記念生命科学財団)
平成9年6月19日	日本整形外科学会賞
平成21年4月29日	瑞寶中綬章
令和5年8月27日	ご逝去 享年92才



■常設委員会

緊急事態対応委員会

担当理事 田 尻 康 人

委員長 三 浦 俊 樹

突発的な事態に対して各委員会の枠組みを超えた迅速な対応・判断が必要になった場合に活動するためコロナ禍に設置された委員会です。幸い、今年度には委員会としての活動を要する事態はありませんでした。

財務委員会

担当理事 田 尻 康 人

委員長 森 崎 裕

メンバー構成

第1回：担当理事 西田圭一郎(岡山大学)、委員長 三浦俊樹(JR東京総合病院)、委員(五十音順) 小寺訓江(日本医科大学)、柳林聡(新東京病院)、吉田進二(東海大学)、若林良明(横浜市立みなと赤十字病院)

第2回：担当理事 田尻康人(都立広尾病院)、委員長 森崎裕(NTT東日本関東病院)、委員(五十音順)、四宮陸雄(広島大学)、柳林聡(新東京病院)、吉田進二(東海大学)、若林良明(横浜市立みなと赤十字病院)、オブザーバー 西田圭一郎(岡山大学)

事務局 2025年1月31日まで 広野・中原・三島氏(アイ・エス・エス)

2025年2月1日以降 井奥・大西・小塚・伏見氏(国際文献社)

2024年度財務委員会は第1回を3月8日に、第2回を12月11日にWeb開催しました。

第1回委員会では2023年度収支決算報告書の確認および2024年度予算案を審議し理事会へ提出し、4月24日の代議員総会にて承認されました。

2023年度収支決算では、予算より収入が約2,000万円増加、支出が約450万円減少し、全体として一般正味財産期末残高は266,229,731円となり、前年度と比べ8,242,128円増加しました。主な内訳

として、学術集会開催費は収入・支出とも予算より増加、インターネット関連費用ではシステム開発が遅れており約1,000万円少ない支出となりました。第66回学術集会の余剰金については税金等を差し引いた金額の半額を奈良県立医科大学に寄附することが審議されました。

第2回委員会は新たなメンバーで開催され、2025年2月1日から国際文献社に事務局が変更する旨の報告、2024年度収支状況(11月まで)の確認、2025年度予算案の審議、第67回学術集会の決算報告が行われました。

2024年度の収支状況では、為替(円安)や価格高騰(会場費、印刷費等)、「手(ハンド)の日」関連事業の影響で予算を超えている費用が支出されていました。2025年度予算案は各委員会からの予算書、第68回学術集会収支予算案等を元に審議されました。収入の部では、会費収入の減少(100万円)、審査認定収入の減少(約370万円)などがありますが、学術集会開催収入の増加(約1,400万円)などがあり、全体としては約1,000万円の収入増が見込まれています。一方、支出の部では、学術集会開催支出の約1,700万円の増加、2024年度は開催されなかった解剖手術手技セミナー費用約450万円が計上されており、機関紙(オンラインジャーナル)発行の委託先切り替えによる約220万円の支出減少、インターネットシステム関連費用の約540万円の支出減少も、すべての事業が行われるとすると約2370万円の赤字となる見込みです(参考:2024年度予算時 約2250万円の赤字)。

支出の必要性、一般正味財産残高なども鑑みると2025年度予算案は全体としては許容できると委員会として判断しましたが、持続可能な日本手外科学会としてあるためには健全な経営を目指すべきであり、引き続き各種委員会の経費削減、未納金の支払いなど、会員の皆様のご理解ご協力をよろしくお願いいたします。

教育研修・オンラインマガジン運用委員会

担当理事 **森 谷 浩 治**
委員長 **小 野 真 平**

2024年度の教育研修・オンラインマガジン運用委員会は、担当理事が村瀬剛先生から森谷浩治先生に、委員長が小笹泰宏先生から小野真平に交代しました。本委員会は、オンライン教育研修会、カダバーワークショップ、オンラインマガジン「Hand Now」の3本柱を中心に、以下のメンバーで活動しています。

- 教育研修会：○黒田拓馬、兒玉 祥、安部幸雄
 - カダバーワークショップ：○織田 崇、鈴木実佳子、岩倉菜穂子
 - Hand Now
 - ・ Backstories：○丸山真博、竹内実知子、森田晃造
 - ・ Q&A：○齋藤太一、河野友祐、金城養典
 - アドバイザー：小笹泰宏
 - オブザーバー：佐々木薫
- (※：○はリーダー、敬称略)

委員会はWeb会議形式で計3回開催(第1回:2024年6月25日、第2回:7月23日、第3回:10月8日)しました。各活動のリーダーおよび委員を選任し、それぞれの活動計画を策定しました。

教育研修会は黒田拓馬先生を中心に進められ、2024年度も前年同様にオンラインで2025年1月20日から3月20日まで開催することを決定しました。昨年同様、1時間のレクチャー7回と30分の論文レビュー6回で構成され、13名の講師を選定し、全員から承諾を得ました。スポンサード講演は京セラ株式会社の協賛により、西田圭一郎先生に肘の人工関節置換術に関する講演をお願いしました。

カダバーワークショップは織田崇先生が中心となり、関節鏡および皮弁コースの座学・実習講師を選定し、2025年8月1日・2日、札幌医科大学解剖学教室での開催を予定しています。

Hand Nowでは、Backstoriesは丸山真博先生を、Q&Aは齋藤太一先生を中心に活動しています。Backstoriesでは、学術集会で優秀演題に選ばれた研究の背景や苦労した点をインタビュー形式で紹介しています。丸山先生をリーダーに竹内先生と森田先生が編集を担当し、完成度の高い仕上がりとなっています。Q&Aは日本手外科学会誌の総説の設問をもとに作成し、齋藤先生が専門医試験委員会や編集・用語委員会と連携しながら、手外科専門医試験に役立つ内容となるよう準備をすすめています。

現在、委員会では教育研修会の次年度以降の開催形式について議論を始めています。コロナ禍でオンデマンド配信が主流となっていましたが、現地開催の利点を見直し、費用対効果を考慮した形式を模索中です。また、自由投稿動画の充実に向けた取り組みも始まっており、日本手外科学会の会員に有用なオンラインコンテンツの充実を目指して、新規事業案の募集を行うアンケートを実施しています。

引き続き、会員の皆様に役立つ研修会やコンテンツを企画して参りますので、ご支援・ご協力のほどお願い申し上げます。最後に、委員、カダバーワークショップ講師、教育研修会講師の皆様に多大な労力をいただいていることに、深く感謝申し上げます。

編集・用語委員会

担当理事 池口良輔
委員長 土田真嗣

2024年度の編集・用語委員会は、担当理事は池口良輔(以下敬称略)が昨年から引き続き担当いただいております。昨年度委員長であった小田 良はアドバイザーとして残っていただき、委員長は土田真嗣に交代しています。26名の委員は、恵木 丈、大井宏之、河村太介、栗山幸治、小藺直哉、佐々木裕美、頭川峰志、園畑素樹、高松聖仁、辻本 律、榎木弘和、那須義久、松井雄一郎、松末武雄が昨年度からの継続で、新たに乾 淳幸、岩本卓士、大久保宏貴、大谷和裕、佐野和史、下江隆司、高木信介、多田 薫、平川明弘、丸山真博、横田淳司、吉田史郎が加わって活動しています。

2024年度の編集・用語委員会の主たる活動内容は、日本手外科学会雑誌第41巻の発行と第8回学会奨励賞(田島達也賞・津下健哉賞)の審査・選定です。本年度もすべてweb会議により委員会を開催いたしました。本年度も2020年から引き続き総説を各号に2編ずつ掲載しております。総説のテー

マは、手外科専門医研修のカリキュラムから選定し、同時に掲載される学術発表論文・自由投稿論文とともに手外科医を目指す多くの先生方に読んでいただけるように、各分野で活躍されている先生方に執筆を依頼しております。総説にはそれぞれ設問を2問用意し、専門医試験委員会で査読いただいたうえで掲載しています。総説のテーマに関する知識整理や専門医試験にお役立てください。総説執筆を担当していただいた先生方とその査読を担当していただいた先生方におかれましては、日常診療でご多忙にもかかわらず快く引き受けていただき、この場をお借りして御礼申し上げます。

本年度も日本手外科学会雑誌の質の向上を目指す観点から、厳正な査読を行ってきました。2025年1月現在、2024年度の論文投稿総数は228編で、採用169編、不採用25編、審査中34編と採用率は74%です。教育的な観点からも査読による改訂を重視し、さらに不採用となった論文に対しては、今後の研究につながるような査読コメントを心がけております。不採用であってもぜひ研究を継続していただき、データを積み重ねて共著者と十分に推敲した上で自由投稿論文として再投稿していただきたいと思っております。

本年度の大きな事業として、古くなった投稿・査読システムを全面的に刷新し、本年度の第41巻からは、「Editorial Manager」で投稿と査読を行い、「J-STAGE」で公開しています。これに伴い、編集事務局は京葉コンピューターサービスからジャーナルサポートに変更しております。できるだけスムーズで質の高い会誌として刊行できるよう、委員会の総力を挙げて取り組んでいます。ご意見やご要望等いただければ幸いです。

学術集会で発表した成果を学術発表論文として投稿すると英文雑誌に投稿する際に二重投稿になるために日本手外科学会雑誌への投稿を控えることが生じていました。この問題に対応できるよう学術集会で発表した成果をProceedingsという形で掲載できるよう投稿規定を改定し、第41巻2号から掲載を開始しました。Proceedingsは、第2号には、5編、第3号には3編、第4号には2編を掲載しました。今後はProceedingsを専門医試験の受験資格として認めるかどうかについて、各委員会と協議をすすめてまいります。

また、第13回日本医学雑誌編集者会議(JAMJE)総会・第13回シンポジウムに理事と委員長で出席し、特にAIによる編集・査読作業の現状と問題点など確認しました。現時点ではほとんどの雑誌で論文の編集・査読作業にAIは使用してはならないとされており、現時点では当委員会でもAIを活用せず編集・査読をお願いしています。査読者に選定された先生方におかれても引き続きAIを用いずに査読をいただくようお願い申し上げます。

第8回学会奨励賞(田島達也賞・津下健哉賞)については、公募の中から2名の候補者を当委員会で選定し、理事会承認を得て、田島達也賞は近藤弘基先生、津下健哉賞は松沢優香里先生に決定しました。両先生は2025年4月10日から11日に開催される第68回学術集会総会で表彰される予定です。

さらに当委員会では必要に応じて手外科用語に関する改変をおこない、会員ホームページに手外科用語集を掲載しております。2024年度日本医学会分科会用語委員会に出席し、ICD 11の国内適用に向けた準備状況を確認しました。学術的に定義が曖昧あるいは不正確な用語や、患者や家族の尊厳を傷つける恐れのある用語が置き換えの対象となっており本委員会でも今後議論を深めていきたいと考えています。

最後に、本年度の第41巻は、2号が2024年11月26日、3号: 12月24日、4号: 2025年1月28日に発刊され、以降5号: 2月27日、6号: 4月8日発刊予定です。遅滞なく発刊するためには、代議員の先生方の期日内の査読が不可欠です。編集・用語委員一同もより一層の努力をしてみたいと思いますので、今後ともご協力のほどお願い申し上げます。また会員の皆様におかれましては、引き続きご支援とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

機能評価委員会

担当理事 **五 谷 寛 之**
委員長 **志 村 治 彦**

2024年度の機能評価委員会は、担当理事は大阪掖済会病院 手外科・外傷マイクロサージャリーセンターの五谷寛之先生、委員は日本手外科学会から山形県立河北病院の渡邊忠良先生、札幌医科大学の花香恵先生、東京ベイ・浦安市川医療センターの志村治彦です。日本ハンドセラピー学会からは奈良学園大学の飯塚照史先生、札幌徳洲会病院の越後歩先生、新潟医療福祉大学の藤目智博先生で構成されています。さらに前委員長である山形市立病院済生館病院の金内ゆみ子先生がアドバイザーとして継続参加してくれています。当委員会の特徴は、日本ハンドセラピー学会の役員の先生方が参加しているところで、手外科の機能評価にはハンドセラピストの意見が欠かせないため貴重な知識や意見を頂いています。Web会議を中心に3～4か月に1回委員会を開催し、今後は4月末の日本手外科学会の会期中に対面での会議を予定しています。

現在の委員会での議題は、主に3題あり並行して進めています。

- ①「前腕回旋角度測定の問題点」 2023年5月に日本手外科学会会員を対象にWebアンケートを実施し、962名の回答(回答率: 26.7%)を頂きました。日本整形外科学会は移動軸を「手掌面」と定めていますが、本アンケートの結果では移動軸は「手関節レベル」が最も多く52%でした。日本整形外科学会の測定方法は交通事故後の後遺障害診断書に使用されており、統一することは困難ですが手外科医は純粋な前腕回内外角度を重視している結果と考えられました(金内ゆみ子ほか.日手会誌41:10-15,2024)。
- ②「握力測定の現状と課題」 2022年4月に日本手外科学会会員を対象にWebアンケートを実施し、660名の回答(回答率: 18.2%)を頂きました。約79%の会員がSmedley式の握力計を使用し、Jamar式は20%にとどまりました(金内ゆみ子ほか.日手会誌40:444-9,2024)。「Smedley式の握力測定方法」に指針は存在しないため、「肘の肢位」「握り幅」「測定回数」などについて推奨方法を提言したいと思います。
- ③「母指CM関節の機能評価」 母指CM関節可動域の角度計を用いた測定は正確性に問題があり、母指示指間の距離を用いた評価方法やX線検査を用いた角度測定方法を用いている手外科医もみられるようです。今後、手外科医またはハンドセラピストに対して、アンケートを行い母指CM関節機能評価の現状や問題点を調査する予定です。

また第68回の日本手外科学会では、「小児手外科疾患の評価」パネルディスカッションに機能評価委員会から「成人の機能評価の課題」を発表予定です。手の機能とその障害を把握し治療効果を見極めるためには、正確な機能評価が不可欠です。現状の問題点と課題を少しでも前に進めることが出来るように、今後とも会員の皆様のお力添えをお願い申し上げます。

国際委員会

担当理事 **佐藤和毅**
委員長 **多田 薫**

2024年度の国際委員会は担当理事と委員長のほか、委員として秋田鐘弼、岩月克之、宇佐美聡、鈴木卓、善家雄吉、長尾聡哉、中島祐子、藤田浩二、吉田史郎、アドバイザーとして市原理司、柿木良介、金谷文則、中村俊康、村田景一（五十音順、敬称略）の計16名で活動しています。

①トラベリングフェロー関連

第67回日本手外科学会学術集会期間中に、トラベリングフェローセッションとフェローランチを開催し、海外からのフェローと活発な意見交換を行い、親睦を深めることができました。2024年12月には東京にて2025年度トラベリングフェローの選考を行い、以下の先生方が選出されました。

JSSH-ASSHトラベリングフェロー 藤原祐樹先生、遠藤健先生

JSSH-TSSHトラベリングフェロー 山中芳亮先生、井汲彰先生

JSSH-KSSHトラベリングフェロー 津村卓哉先生、米田英正先生

JSSH-HKSSHトラベリングフェロー 黒岩智之先生

また、TSSHおよびKSSHとは更なる人材交流の活性化を目指し、各国の担当者間で調整を行った結果、2025年度からは2名ずつの相互派遣を行うことになりました。フェローの総数は10名から14名に増加しましたが、引き続き、きめ細やかなおもてなしの心を大切にし、各国との友好関係を維持していきたいと思います。

②Pioneer of Hand Surgery

2025年3月に開催されるIFSSH（国際手外科学会）において、「Pioneer of Hand Surgery」の候補者を募る機会がありました。自薦および他薦により候補者が選出され、日本手外科学会からは5名の先生方を推薦することとなりました。その結果、藤哲先生、落合直之先生、別府諸兄先生、柴田実先生、金谷文則先生の5名全員が選出されるという快挙を成し遂げられました。この結果は各先生方の卓越した功績と多大な貢献が世界的に認められた証と言えます。この場をお借りして、心よりお祝い申し上げます。なおIFSSH期間中には5名の先生方が選出されたことを記念して、現地でJSSH会員懇親会を開催する予定です。

③ IFSSH committee elections

IFSSHから2025 IFSSH committee electionsに関する通達があり、国際委員会での審議と理事会での承認を受け、「Executive committee Member-at-Large」として市原アドバイザーを推薦することになりました。この選挙は世界の各地域から地域の代表者5名を選出するものであり、アジア・オセアニア地域からは1名が選出されることになっています。

④ 特別企画

第68回日本手外科学会学術集会の期間中に、三上学会長のご厚意により国際委員会の特別企画として「Travelling Fellowのススメ」が開催されることとなりました。本企画は長尾委員を中心に進められており、トラベリングフェロー経験者や国際委員会内の各国担当者が登壇し、日本手外科学会のトラベリングフェローに加え、関連学会のトラベリングフェローに関する情報提供を行う英語セッションとなります。この特別企画を通じて、トラベリングフェローを目指す若手の先生方が増えることを期待しています。

⑤ 2025年度以降の予定

2029年に日本で開催するAPFSSH(アジア太平洋手外科学会)、2026年以降に日本が主催するJASSH(日米合同手外科会議)に関して、アドバイザーの先生方を中心に国際委員会で準備を進めております。

広報渉外委員会

担当理事 佐 竹 寛 史

委員長 中 川 夏 子

令和6年度の広報渉外委員会は、昨年同様WEB開催となりました。

委員会のメンバーは、理事の佐竹寛史先生、アドバイザーの岸陽子先生、委員長の中川夏子、委員の佐々木規博先生、堂後隆彦先生、西脇正夫先生、藤田浩二先生、宮崎洋一先生です。

第1回委員会は2024年7月11日に、第2回委員会は2024年10月21日に、第3回委員会は2025年2月10日に行っております。

当委員会の主な取り組みは、1) 日手会ニュースの発行 2) 手外科シリーズの改訂 3) 日整会シンポジウムへの提言 4) ホームページの管理・変更 5) 日手会の広報です。

今年度としては特に、日手会の広報に関連して、ハンドの日の取り組みにご注目いただきたいと思います。

1) 日手会ニュースの発行

2024年9月に号外号、2025年3月には60号を発行しております。手外科医のリスクマネジメントや、手外科バトンリレー、joyの声などを継続しております。またリレーエッセイでは新技術紹介を掲載していますが、主に日手会でのシンポジウムからの採択となっています。また引き続き61号についても内容を決定していきます。

2) 手外科シリーズの改訂について

No28 (PIP関節脱臼骨折)、No29 (癰痕・癰痕拘縮)、No30 (握り母指症)、No31 (斜指症)、No32 (手指の骨折)、No33 (橈骨神経麻痺(下垂手))、No34 (有鉤骨鉤骨折) について、意見を交換しながら議論を重ね、最終的な変更案を作成するに至りました。

3) 日整会シンポジウムへの提言

日本整形外科学会 2026 に関しては、PIP 関節への人工関節置換術の適応と限界、手指 PIP 関節近傍骨折 (関節内含む) の治療戦略の 2 題を推薦いたしました。

4) ホームページの管理・変更

ホームページについては、将来展望戦略委員会からの日手会 HP への動画掲載の依頼について、トップページにバナーをおき、クリックして動画閲覧できるように、また、キャリアアップ委員会からのお知らせなどをわかりやすく掲載するようにいたしました。今後は、委員会でホームページ全体の見直しや変更についても検討をまいります。

5) 日手会の広報

手外科の認知度向上を目的としたハンドの日のイベントを 2024 年 8 月 10 日に東京慈恵会医科大学 2 号館講堂で開催しました。第 1 部では「音楽家の手について語る」「音楽家による演奏」を、第 2 部では牛尾茂子先生に「女性疾患としての手外科疾患 更年期の手の不調～それって本当に使いすぎや年のせいですか～」というテーマでご講演いただきました。Web あわせて 200 人が参加され盛会でした。

今年、2025 年 8 月 10 日のハンドの日の企画についても非常に魅力的な内容になる予定で、現在進行形で検討中でありますので、多くの先生方のご参加、また周知をお願いしたいと思います。また 2026 年 8 月 10 日のハンドの日の企画について会員の皆様から広くご提案をいただく方向ですので、この点もどうかご協力をお願いいたします。

6) 整形外科グロースアップセミナー 2024 全国講演会

2024 年 8 月 4 日に行われた研修医、専攻医を対象とした講演会で岩崎倫政前理事長に座長をしていただき、酒井昭典理事長に手外科の魅力についてご講演いただきました。広報渉外委員会としては 2025 年学術集会のポスター掲示、漫画「テノゲカ」の案内、日本手外科学会の歴史と発展のポスター掲示を行いました。

社会保険等委員会

担当理事 **服 部 泰 典**
委員長 **建 部 将 広**

令和 6 年度社会保険等委員会は、服部泰典担当理事の下、亀山真、木村洋朗、兒玉祥、中山政憲、三浦俊樹、依田拓也 (50 音順、敬称略) と委員長の建部将広の計 8 名で活動を行っております。社会保険等委員会は、診療報酬改定に関する情報を学会会員と共有することなどを事業として行っております。また、外科系学会社会保険委員会連合 (以下外保連) の手術、実務、麻酔、処置、検査各委員会

へ委員を派遣し外保連活動への協力を行っております。各委員は実務(三浦)、処置(中山)、手術(兒玉)、麻酔(木村)、検査(依田)が努めています。日手会としては2年ごとに行われる診療報酬改定に関連した事業を行っています。具体的な事業内容としては、新規申請ならびに改正申請について、学会からの要望を作成・提出しています。直近の事業内容および今後の予定についてご報告申し上げます。

A. 会議日程

第1回：令和6年7月14日(web会議)

第2回：令和7年2月(外保連実務委員会後に予定)

第3回：令和7年3月(新設・改正・材料要望項目要望書締切前に予定)

このほか、適宜メール審議を行っております。

B. 令和8年度診療報酬改定の提案に向けて

代議員へのアンケート結果を第一回委員会で検討の上、令和6年9月末に外保連への学会要望について下記3点を提案しました。

- ① 胸郭出口症候群根治術(新規)：胸郭出口症候群に対する手術は腕神経叢部を展開し、神経を周囲組織から剥離・展開したうえで、障害となっている組織を切除する(第1肋骨切除など)などの処置を行っていることが多いが、現状では神経剥離術、肋骨切除術(第1肋骨)、斜角筋切断、頸肋切除術のいずれかで算定している状況にあり、術式としての新設を要望しました。
- ② 関節鏡視下偽関節手術(外保連試案なし・新規)：近年、舟状骨偽関節に対する関節鏡下偽関節手術の有用性が報告されています。関節内の病変に対し、関節包への侵襲を最小限とし構造物への血流が温存可能となるといった利点があり、局所の観察にも優位とする報告がされていますが、現状同様の手術術式は登録されておらず、術式としての新設を要望することにしました。外保連試案にはなかったため、新規術式として試案登録を申請し、提案しています。
- ③ 人工関節置換術・肘関節(改正)：肘関節の人工関節置換術は蝶番関節としての構造を持ち、周囲の神経組織の保護など手術難易度も高いと考えられることから、現在の点数からの増点を要望しました。

これらの提案に関し、今後は令和7年3月には提案書を外保連に提出し、承認を経て厚生労働省に提出する運びとなっております。なお、厚生労働省に提出する資料について、技術新規申請／改正申請にあたっては、「提案実績の有無」「提案当時の名称」「追加のエビデンスの有無」「ガイドライン等での位置づけ」「薬事承認されていない医薬品・医療機器又は対外診断用医薬品の有無」の記載が必要です。要望書作成・厚生労働省でのヒアリングに向けて、代議員の皆様には実態調査などのご協力をお願いさせていただく予定です。お忙しいと存じますが、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

C. 学術集会における保険診療に関するセミナー

例年社会保険等委員会からの提案で保険診療に関するセミナーを開催しており、第68回学術集会で

も委員会からの提案として教育研修講演を行う予定です。支払基金側からの普天間朝上先生にお願いし、社保委員会側から30分ずつ講演する機会をいただきました。今後は委員会活動の一環として、学会員を対象に保険診療に関するセミナー開催を行うことも検討しております。

D.外保連活動

「整形外科領域のKコードを部位別に見直す検討会議」が発足し、日手会社保委員会からは建部が担当しました。令和6年春に草案がまとまり、厚生労働省に提出しています。令和8年度での診療報酬改正の際に合わせて、整形外科領域のKコードの再編を行う予定となっています。

診療報酬改定に際してだけでなく、今後も会員の皆様からの保険診療に関してご要望がある場合には、対応可能か検討させていただきますので、ご意見を頂戴できればと思っております。

先天異常委員会

担当理事 **鳥谷部 莊 八**
委員長 **西 村 礼 司**

先天異常委員会の主な活動は、手の先天異常懇話会の開催、手先天異常のエビデンス向上の取り組み、手の先天異常症例相談窓口の運営などがあります。本委員会活動により日手会員の先天異常手診療に少しでも役立つ情報を発信できることを目標にしています。

【手の先天異常懇話会】

第62回手の先天異常懇話会を、第67回学術集会期間中の2024年4月25日に開催しました。今回は「裂手(裂足)」をテーマに症例を提示頂き、意見を交換しました。前回の懇話会でテーマとした母指化術が、術者によって術式にバリエーションが多いことを踏まえて9名の先生方にプレゼンテーションをお願いしました。今回のテーマでも同様に治療方針が画一的ではないため、5名の経験豊富な先生方(川端秀彦先生、齊藤晋先生、高木岳彦先生、鳥谷部莊八先生、福本恵三先生、五十音順)にプレゼンテーションをお願いしました。それぞれの先生から実際の症例と治療法のコツやピットフォールをご説明頂き、活発な討議が交わされました。

【小児の機能評価に関する議論】

成人の機能評価では、DASH、MHOQ、HAND20といった患者立脚型評価法が広く用いられるようになっております。そして近年では、国内外において小児に対しても患者立脚型評価法を普及させる必要性が指摘されるようになってきました。そこで、当委員会で小児のアウトカム評価法について再検討を行うこととしました。どのようなアウトカム評価を採用するかは、治療法と医療サービスいずれの発展にも大きく影響します。また、小児を対象とした評価は、多動性や協力度のばらつきから正確な計測が困難であること、主観の表出度に個人差/年齢差が大きいこと、など成人の評価とは異なる小児固有の難しさがあります。2006年に公表された日本手外科学会の機能評価表第4版には、

当時先天異常委員であった先生方による手先天異常の評価表が含まれております。ここでは代表的な先天疾患：母指多指症、合指症、合短指症、裂手症、絞扼輪、橈側列形成不全、屈指症、巨指症が取り上げられています。第68回学術集会では小児の手機能評価に関するパネルを設けて頂き、これら既存の評価表をベースとして小児の手機能評価における問題点や将来あるべき評価方法について議論する予定です。

【構成員】 担当理事：鳥谷部 莊 八 アドバイザー：齊藤晋、佐竹寛史、高木岳彦、委員：今泉督、上里涼子、柿崎潤、佐々木薫、仲宗根素子、西村礼司、根本菜穂

倫理利益相反委員会

担当理事 **鳥谷部 莊 八**
委員長 **安 田 匡 孝**

2024年度の本委員会では、担当理事の福本恵三先生がご退任され、新たに鳥谷部 莊八先生が着任されました。福本先生には、本委員会に多大なるご尽力とご指導を賜り、深く感謝申し上げます。その他のメンバーは、外部アドバイザーの塚田敬義先生、前委員長でアドバイザーの辻本律先生、外部委員の山我美佳先生、委員の楠原廣久先生と佐々木信幸先生、そして私、委員長 安田 匡孝です。本委員会では、基本的に毎月、新入会申請者の認定審議をメールで行っています。2025年に横浜で開催される学術集会では、本委員会提案の教育研修講演案が採択され、塚田先生と山我先生のご講演を予定しています。昨年度と同様に6月に予定していた役員等のCOI自己申告書の供覧は、スケジュールが遅れ、2024年11月にオンライン会議で完了しました。今年度は役員等の改選があり、この影響で審議が遅れてしまいました。会議では、留意すべきCOI事例が確認され、審議結果を該当申告代議員および所属委員会担当理事に通知するとともに、鳥谷部先生に理事会での審議をお願いすることになりました。なお、これが私にとっての最後の本委員会での活動となります。これまでご協力頂いたすべての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

学術研究プロジェクト委員会

担当理事 **松 田 健**
委員長 **佐 藤 光太郎**

【構成員】

2024年度学術研究プロジェクト委員会の構成員は、松田健担当理事、佐藤光太郎委員長、今田英明委員、岡崎真人委員、岡田充弘委員、金谷貴子委員、櫻庭実委員、園畑素樹委員、高木誠司委員、高松聖仁委員、山内大輔委員、加地良雄アドバイザーです。英語論文賞の創設などに伴う審査業務の負担が増えたため、来年度より委員を5～6名増員する予定となっております。

【活動内容】

web会議を2024年12月2日に開催、更に委員会後のメール審議を行い、2024年度学術研究プロジェクトの選出、2025年度学術研究プロジェクトテーマの選定、過年度プロジェクトの進捗状況確認、英語論文賞の選出などを行いました。その他、適宜メール審議を行いました。また、天児民和賞の募集業務、学会と学術集会の連携強化(委員会企画セッションの提案)の窓口として各委員会への企画募集業務などを行っています。

<2024年度学術研究プロジェクトの選出>

今年度の研究テーマは①手外科学分野の高いエビデンスが得られる臨床研究、②実臨床に寄与する基礎研究、③胸郭出口症候群 として募集を行い、14件の応募がありました。

新規性・独自性、妥当性・実現性、研究デザイン、国際性、倫理面への配慮等を評価項目として厳正な審査を行い、下記2件のプロジェクトを選出し、それぞれに50万円の助成をすることとしました。

- 指切断患者のQOL向上と社会復帰を支援する患者中心設計の可動式義指の開発

日本医科大学 形成外科学教室 小野真平 先生

- 胸郭出口症候群に対する前斜角筋筋肉内ブロックの超音波エラストグラフィによる筋弛緩効果の評価に関する研究

山形大学医学部整形外科学講座 仁藤敏哉 先生

<2025年度学術研究プロジェクトテーマの選定>

2025年度学術研究プロジェクトの助成総額は100万円とし、テーマは次の3つを選定しました。

- ① 手外科学分野の高いエビデンスが得られる臨床研究
- ② 実臨床に寄与する基礎研究
- ③ 手外科におけるコンピュータ支援診療

<過年度採用学術研究プロジェクトの進捗状況の確認>

過年度採用学術研究プロジェクトの進捗状況を確認しました。

<英語論文賞について>

今年度の英語論文賞には12件の応募がありました。Impact Factor、関連する代表的な論文、新規性、独自性、国際性、手外科領域の臨床への貢献度を評価項目として厳正な審査を行い、英語論文賞に下記2名を選出しました。

- Quantitative 3-D CT Demonstrates Distal Row Pronation and Translation and Radiolunate Arthritis in the SNAC Wrist

J Bone Joint Surg Am. 2023 Sep 6;105(17):1329-1337.

大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学(整形外科) 宮村聡 先生

- Micronized Cellular Adipose Matrix Promotes the Therapeutic Effect of an Artificial Nerve Conduit in Peripheral Nerve Gap Injury
Plast Reconstr Surg. 2023 Jun 1;151(6):959e-969e.

京都府立医科大学附属病院 澤井誠司 先生

＜学会と学術集会の連携強化について＞

各委員会宛（委員長並びに担当理事宛）に学術集会で企画するセッション案の募集を行いました（2024.2.7から3.25まで）。10件の応募があり、そのうち7つが第68回日本手外科学会学術集会（三上容司 会長）でのセッションとして採用されました。

今年度も日本手外科学会の学術・研究部門を支えるべく、担当理事のもと尽力してまいります。引き続き、ご指導・ご鞭撻をよろしくお願い致します。

専門医制度委員会

担当理事 **山 本 美知郎**
委員長 **射 場 浩 介**

【委員会メンバー】

岡久仁洋、河村健二、栗本秀、櫻庭実、助川浩士、辻井雅也、中島祐子、林原雅子、藤原浩芳、古川洋志、吉井雄一とアドバイザーとして田中克己、西田圭一郎（五十音順、敬称略）で活動しています。

【活動内容】

日本専門医機構によるサブスペシャリティ領域の手外科専門医として認定を受けるための活動を行っています。専門医制度は形式だけではなく内容が大事であることは言うまでもありません。手外科専門医が機構による品質保証を受けることにより、信頼できる専門的・標準的な治療を受けたい国民と、自信を持って医療を担当できる一人前の医師になりたい専攻医の希望をともに叶えること出来ると考えています。

2024年度の本委員会の活動内容は、日本専門医機構から2023年2月に提出済みの整備基準とレビューシートの修正依頼を2024年10月に受けて対応を行い、理事会審議を経て2024年11月に領域連絡協議会の三上容司先生を通じて提出しました。その後、2025年1月に日本専門医機構の委員から再度、整備基準とレビューシートに対するコメントを頂き、専門医制度委員会を開催して回答案を作成しました。日本専門医機構からは①基本領域との連動研修の廃止や②基幹研修施設と関連研修施設の差別化などの指摘を受けており、委員会では①基本領域との連動研修は廃止して手外科専門研修期間を3年間とし、②基幹研修施設を基準A、関連研修施設を基準Bとして基準Aで1年以上、基準Bは3年以上の研修を行う修正案でまとめ、理事会審議中です。

【今後の予定】

2025年2月現在、日本専門医機構サブスペシャリティ領域検討委員会の審査を受けており、その後は、更に同機構の専門研修プログラム委員会での審査があるようです。日手会専門医制度委員会が提出した整備基準やレビューシートとカリキュラムに対して様々なコメントや修正依頼を引き続き頂く可能性があります。合わせて専門医制度細則の改定やカリキュラムの改定も必要になります。当委員会のメンバー及び関連する委員会（専門医資格認定・施設認定委員会、専門医試験委員会、カリキュラム委員会、定款等検討委員会、キャリアアップ委員会）の先生方の協力を仰ぎつつ、日本専門医機構の認定を受けるための手続きを進めてまいります。会員の皆様のご理解とご支援を何卒よろしくお願いいたします。

専門医資格認定・施設認定委員会

担当理事 **橋 本 一 郎**

委員長 **河 野 正 明**

今年度、専門医資格認定・施設認定委員会は、理事：橋本一郎先生、アドバイザー：齊藤晋先生、中尾悦宏先生、長谷川健二郎先生、森田哲正先生、委員：岩川紘子先生、金谷貴子先生、鎌田雄策先生、斎藤太一先生、高木信介先生、堀内孝一先生、松井雄一郎先生、本宮真先生、委員長：河野正明で開始しました。

2024年7月5日に第1回Web委員会を行い、指導医申請31名と認定研修施設新規申請8施設について審査を行い問題ないことが確認されました。

2024年8月19日に第2回Web委員会を開催し、専門医認定の申請について議論されました。専門医申請資格として細則の第5条に記してあるすべての条件を具備していなければならないとあるが、これに関しては厳格に守るべきとの結論を得ました。そのため、(専門医試験)に関する第7条の5にある「試験に不合格であった者も、第5条の条件を満たせば次年度以降、試験のみの再受験(研修証明や行政の提出を省略できる)の受験資格を有する」という文章は不適切な表現である。それゆえこの5.そのものを削除するもしくは「試験に不合格であった者も、第5条の条件を満たせば次年度以降申請資格を有する」という表現に変更すべきとしました。

専門医制度の【育児・出産】にかかる猶予申請について、今年度より専門医制度細則第5条(8)②業績「(vi) 専門医申請における猶予」の変更に伴い、専門医新規申請の場合でも業績期間の猶予期間を認めることとなりました。これを受けて2024年11月5日キャリアアップ委員会と合同でWeb委員会を行い、①「原則2年間」の定義付けについて議論した結果、細則の原則通り「一律2年」とすることと決定しました。その際正しい理解を得るためにFAQを追加することとしました。②申請の際の認定期間(直近5年間)に第1子、第2子と出産育児が重なった場合、子どもの人数によって猶予期間はどうかについて議論し、複数出産に関する記載は細則にはないため、出産が複数回あっても申請時に認められる猶予期間は2年が妥当であると決定しました。これに関してもFAQを追加することとしました。③猶予申請の際に必要な書類について議論し、現存する専門医更新の際の猶予申請書

を新規申請時にも使用することとし、その用紙の最下段の申請理由の下の欄外に「申請理由を証明できる書類を添付すること」と付記することとしました。④男性取得の場合も原則2年間となるのかについても議論し、細則には性別を記載していないため、原則通り申請があれば男性医師でも2年の猶予とすると決定しました。⑤猶予申請者に猶予されるのは業績だけであり、このことを理解しやすい様に、FAQを追加することとしました。

2024年12月2日に第3回Web委員会議を開催し、125名の専門医の更新の審査を行いました。提出した書類に不備があると判断した専門医について訂正する要望を委員長から行い無事更新できました。

2024年12月16日に認定研修施設の新規申請分更新申請の審査を行いました。資格を満たす施設については全て審査通過させることができました。

その他、専門医の更新の際に必要な単位が揃っていないことが少なくないため、日本手外科学会が開催される前の1月に専門医全員に事務局から更新期限日を知らせ、取得単位の確認を促すようにしました。

専門医資格認定・施設認定委員会は、アドバイザーの先生方の御指導と委員の先生方の時間をかけた詳細なチェックのもとに成り立っており、大変感謝しております。引き続きよろしくお願い申し上げます。

専門医試験委員会

担当理事 松田 健
委員長 佐々木 薫

1) 委員会メンバー

専門医試験委員会のメンバーは、担当理事は松田健、委員長は佐々木薫、委員は赤羽美香、尼子雅敏、新井健、石河利広、今泉督、大久保宏貴、奥井伸幸、幸田久男、河村真吾、白幡毅士、助川浩士、植崎慎二、依田拓也、アドバイザーは田中啓之、内藤聖人、山崎宏の18名で活動しています。

専門医試験問題の作成、専門医試験の実施、日本手外科学会誌の総説設問の査読が業務となっています。

2) 専門医試験問題の作成

新作問題の作成を担当理事・委員・アドバイザーが分野別に担当し、2024年8月より作問を開始し、Web会議ツール『Webex Teams』を用いてブラッシュアップを行った。2025年2月には委員会を開催し、対面で試験問題の最終ブラッシュアップを行い、試験問題は選りすぐりの50問（うち整形・形成分野別問題4問）となります。試験内容は基礎医学、診察法、手術基本、骨折・脱臼・靱帯損傷、腱損傷、末梢神経、循環障害、先天異常、関節変性疾患、炎症性疾患、腫瘍、拘縮、手関節疾患、特殊な外傷、マイクロサージャリー、内視鏡、リハビリ・装具、医療倫理・医療安全の18カテゴリーから出題されます。

3) 専門医試験の実施

昨年の第15回専門医試験は第67回学術集会翌日2024年4月27日奈良(奈良ロイヤルホテル)で行われました。

次の第16回専門医試験は学術総会翌日(2025年4月12日)に開催の予定です。学術集会は横浜開催ですが、受験生の試験後の利便性を考慮し、東京駅から徒歩圏内のAP日本橋での実施を予定しています。試験形式は昨年と同様で、試験内容は筆記試験のみで口頭試験は今回も行わないこととなりました。試験結果につきましては、2025年5月中旬～後半には委員会審議、理事会承認を経てお知らせできる見込みです。

4) 日本手外科学会誌の総説設問の査読

日手会雑誌に総説を執筆する先生には、専門医試験の様式に則った「新作問題と答え」を2問作成いただいています(総説設問)。この総説設問をWebex Teams上で担当理事・委員・アドバイザーが順次締切に併せてブラッシュアップを行いました。これまで編集委員会からの4問の査読が終了し、編集委員会に送付した。出版後に教育研修・オンラインジャーナル委員会に送付、順次Q&Aコーナーに掲載されます。

次年度も適切な専門医試験が実施されるよう引き続き準備を進めてまいりますので、会員の皆さまのご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

カリキュラム委員会

担当理事 **佐 竹 寛 史**
委員長 **日 高 典 昭**

2024年度のカリキュラム委員会は、佐竹寛史担当理事(山形大整形)のもと、委員は乾敦幸(神戸大整形)、金城養典(清恵会病院整形)、河村大介(NTT東日本札幌病院整形)、下江隆司(和歌山医大整形)、田鹿毅(群馬大整形)、鍋島央(九州大整形)の各先生から構成されており、委員長は日高典昭(阪和記念病院整形)です。

本委員会の主な業務は、専門医制度細則に則って教育研修講演の認定を行うことです。1か月毎に申請書類が委員に送られ、メール審議を行います。2024年1月から2024年12月までの間に申請された講演数は合計245講演、そのうち初回審査で承認したものが222講演、タイトルの変更や推薦状・要旨など追加書類の提出後に承認したものが19講演、非承認もしくは取り下げとなったものが4講演でした。

承認の適否は、専門医制度細則と日手会教育研修講演に関するFAQにしたがって判断しますが、これらを読まずに申請したと考えられるケースが時にみられます。申請書の冒頭にチェックボックスを作成していますので、迅速に手続きを進めるために細則とFAQをよく読んでいただき、「手外科との明らかな関連性」が分かる形で申請をして下さい。なお、FAQは承認の基準を明確にするため、

必要に応じて追加・修正を行っていますが、今年度については特に変更はありませんでした。

申請された講演はいずれも素晴らしい講演と思われますので、委員会としては可能な限り承認する方向で考えています。カリキュラム委員会の活動へのご理解とご協力を今後ともよろしくお願い申し上げます。

情報システム委員会

担当理事 村 瀬 剛
委員長 松 浦 佑 介

【委員会構成】

情報システム委員会は、担当理事、村瀬 剛先生のもと委員長を私、松浦佑介が務め、委員として岡久仁洋先生、栗本秀先生、鈴木拓先生、松井雄一郎先生、宮脇剛司先生、吉井雄一先生、アドバイザーとして西浦康正先生にご助言をいただき、計9名のメンバーで活動を行っています。

【委員会活動】

本委員会では、日手会会員、専門医・指導医、研修施設など、様々なデータの一元的管理をシステム化する業務を行っております。様々な申請、手続きをシステム化することにより、作業量の削減を図り、日手会の事務局や会員の皆様に還元することを目的としております。現在システム改修の第2フェーズが大詰めを迎えております。2023年7月1日より日手会入会申請手続きがオンライン化し、運用が開始されました。また、研修認定施設管理システムならびにオンライン決済システムが今年度中に運用を開始し、今後、研修認定施設申請・更新システムの運用を進めてまいります。研修認定施設管理のシステム化にあたり、電子メールや診療施設等の会員情報の整理が必要であり、会員への情報周知と確認作業の徹底を実施いたしております。さらに、専門医資格認定・施設認定委員会や倫理利益相反委員会などの関連委員会と合同会議を行い、よりユーザー目線に立ったシステム構築を進めていくとともに、それに合わせた細則の変更等、各所と連携を取って進めていく所存でございます。

さらに専門医機構の審査によって保留となっていた専門医申請・更新・承認業務のシステム化についても、前向きに作業を進めていく方針でございます。皆様が使いやすいシステム構築を目指し、順次進めてまいりますので、ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます

会議等を以下の通り行いました

- 2023年1月20日 第1回倫理利益相反委員会/情報システム委員会合同会議
：オンライン入会申請システムの内容の確認・方針決定
- 2023年1月26日 KCSとの打ち合わせ
：会員管理システム、認定施設管理システム、オンライン入会申込システムの仕様確認
- 2023年2月20日 KCSとの打ち合わせ
：会員管理システム、認定施設管理システム、オンライン入会申込システムの仕様確認

- 2023年3月10日 情報システム委員会
：認定施設管理システム、オンライン入会申込システム、オンライン決済システムについて
- 2023年5月22日 KCSとの打ち合わせ
：認定施設管理システム、オンライン入会申込システムの仕様確認
- 2023年6月23日 KCSとの打ち合わせ
：認定施設管理システム、オンライン入会申込システムの仕様確認
- 2023年8月4日 KCSとの打ち合わせ
：認定施設管理システム、オンライン入会申込システム、オンライン決済システムの仕様確認
- 2023年8月30日 KCSとの打ち合わせ
：認定施設管理システム、オンライン決済システムの仕様確認
- 2023年10月24日 KCSとの打ち合わせ
：認定施設管理システム、オンライン決済システムの仕様確認
- 2023年11月16日 KCSとの打ち合わせ
：認定施設管理システム、オンライン決済システムの仕様確認

キャリアアップ委員会

担当理事 原 友 紀
委員長 仲宗根 素 子

キャリアアップ委員会は、手外科医のキャリア形成支援、男女共同参画、専門医数の地域格差への対応を目的として活動しております。今年度は担当理事・アドバイザーを含む14名で、対面およびオンラインでの会議を3回、メール審議を複数回開催し、以下の活動を行いました。

【主な活動】

・キャリアアップ委員会セッションの企画・開催

第67回日本手外科学会学術集会にて「世代別キャリアアップ 過去、現在、未来」と題したパネルディスカッションを行いました。多世代の医師が経験を共有し、キャリア形成における具体的な課題と解決策を議論しました。

第68回日本手外科学会学術集会では「手外科専門医への道-専門医少数在籍地域における取り組みと成果-」をテーマに委員会シンポジウムを企画しています。手外科専門医が少数在籍する地域における特例措置の実現を背景に、専門医資格を取得された先生や現在研修中の先生方にご登壇いただき、専門医偏在解消のための取り組みや成果を振り返り、今後の展望について話し合う予定です。

・日本医師会女性医師支援センター補助金事業を活用した座談会

2024年11月10日に「キャリア意識、どう変化した？～異なる背景から学ぶ、未来を切り開く～」をテーマにオンライン座談会を開催しました。参加者は160名で、若手医師（20代・30代）が34%を占めました。4名の演者および委員会メンバーが、地方でのキャリア形成や無所属医師の挑戦、ライフ

イベントとの両立、若手の課題、世代間ギャップ、形成外科医のキャリアなど、多様な課題について経験を共有しました。事後アンケートでは、多くの参加者が「今後の働き方にとって役に立つ部分があった」と回答し、キャリア形成への視野が広がったと評価されました。本座談会はキャリア形成を支える組織的課題を考える貴重な機会となりました。

・専門医申請における猶予期間に関する審議

特に育児や介護を考慮した申請の猶予制度に関して審議を行い、専門医資格認定・施設認定委員会委員会との合同協議を行いました。

・トラベリングフェローの選考基準見直しに関する議論

マイノリティー枠創設や応募基準緩和を提案。引き続き委員会で検討を重ねる予定です。

・従来の活動の継続

日手会ニュース「Joyの声」企画、学会託児所の運営支援、専門研修施設の募集と現況調査、日手会HP内の委員会ページの更新等を行いました。

【まとめ】

本年度の活動を通じて、多様なキャリアパスの提示や働き方に関する課題の共有を進めました。本委員会活動が若手医師にとって貴重なロールモデルとなり、キャリア形成の道筋を示す場となったと考えております。引き続き、日本手外科学会の発展と医師のキャリア支援に向けた活動を推進してまいります。

特別委員会

定款等検討委員会

担当理事 川崎恵吉
委員長 前田和洋

【委員会メンバー】

当委員会は、担当理事：川崎恵吉、委員長：前田和洋、岩川紘子、太田英之、加地良雄、金谷耕平、坂本相哲、佐々木信幸、平川明弘、村田景一、森田晃造の各委員に加え、前任の委員長である上原浩介をアドバイザーとして迎え、計12名で活動を行っています。

【委員会活動】

定款、細則の見直しの必要性が生じたときに、委員会を開催し変更箇所の検討、追記、修正を行うことが当委員会の業務内容です。コロナ禍から引き続き、活動はメール審議で行っていますが、2024年4月以降の本年度は審議した内容はありませんでした。そこで、2024年3月に発行された日手会ニュース59号に記載されていない、本年行われた審議内容を以下に示します。

1. 「一般社団法人日本手外科学会」定款施行細則第6号 専門医制度細則の追加

キャリアアップ委員会から専門医受験申請における病気、出産、育児による猶予について細則に追

記の要請があり、理事会での承認後、文言の確認・修正を行いました。

2. 一般社団法人日本手外科学会「定款施行細則第3号 代議員選挙細則の変更と追加

代議員選挙において、ある地区で代議員が定数より少なかったという事例が生じたため、代議員数が定数250人に満たないときの対応を明文化しました。具体的には、当選人数が代議員定数を下回った場合には、理事会の求めに応じ、当該地区の不足枠に対して追加選挙を実施する第18条を新規に追加し、その文言の確認・修正を行いました。

以上、今年度の活動報告とさせていただきます。お忙しい中、貴重な意見を出し、活発に議論いただきました各委員の先生方に、この場をお借りして深謝いたします。

手外科専門医検討委員会

担当理事 原 友 紀
委員長 若 林 良 明

2024年度の手外科専門医検討委員会は、メンバーも新たに、2023年度に引き続き、日本専門医機構の新専門医制度におけるサブスペシャリティ（以下サブスぺ）領域承認を目指して、前任委員長の三上容司アドバイザーのご指導のもと、原友紀担当理事、若林良明委員長をはじめ、上原浩介、佐々木薫、田中克己、吉田史郎の各委員で構成されています。三上アドバイザーが日整会に設置されたサブスぺ連絡協議会に日手会代表委員として参加し、基本領域学会との連携・調整を図るとともに、連絡協議会を通じて専門医機構とのやり取りを行っています。

サブスぺ承認に向けた動きとしては、2023年12月に三上アドバイザーから専門医機構に提出した「手外科領域のサブスぺ領域審査」について、2024年10月に機構から発出された細則第二版「サブスペシャリティ領域の指定と認定のための詳細規定」に基づき、カテゴリー1以外での申請をすること、整備基準及びレビューシート等を修正することの2点の修正依頼が届きました。これを受けて、手外科関係委員会を中心に修正作業を行い、11月に三上アドバイザーから修正した整備基準、レビューシート、手外科カリキュラムをサブスぺ連絡協議会に提出しました。なお、当初は手外科はカテゴリー1として申請していましたが、上記の機構からの指摘を受け、今回はカテゴリー2で申請することになりました。

また前年度委員会の検討事項を引き継ぎ、第68回学術集会における「手外科の社会性」のシンポジウムの演者・内容を協議した結果、山本美知郎先生、大蔵倫博先生、市田泰弘先生、古屋晋一先生、市原理司先生に演者をお願いすることが決定し、非会員の先生からも演者をご快諾いただきました。

当委員会は、日手会（手外科領域）がサブスぺ領域として専門医機構に認定されるまでという期限付きの委員会ですが、それまでは他の専門医関連委員会と連携しつつ、他の委員会の枠におさまらないサブスぺ領域承認に向けた役割を担って参ります。どうぞ今後とも宜しくお願い致します。

将来展望戦略委員会

担当理事 **橋 本 一 郎**
委員長 **山 本 真 一**

2024年度将来展望戦略委員会のメンバーは、担当理事に橋本一郎先生が就任し、他はアドバイザーに平田仁先生、篠原孝明先生、委員は高木誠司先生、西浦康正先生、日高典昭先生、村瀬剛先生、委員長の山本真一と変更はなく、web会議を中心に活動してきました。

本委員会は、アンケート調査対応委員会として2020年度に発足しましたが、名称変更して、手外科認知度向上や企業との連携探求の企画を理事会へ提案し実践することを活動方針としています。

まず、2021年11月のオンラインフォーラムを発展させて、第67回(2024年度)学術集会@奈良で、更年期女性疾患にターゲットを絞った合同公開シンポジウム「メノポハンド (Menopausal Hand)」を企画しました。収支を学術集会とは別とした趣意書を作成・広募して、大塚製薬共催、ニプロ・Arthrex広告後援として、「変形性関節症」をテーマに開催しました。医師側は、平瀬雄一先生(世界の動向)・里中東彦先生(装具療法)・池口良輔先生(運動療法)・下江隆二先生(薬物療法)、市民代表として女性の健康とメノポーズ協会・三羽理事長、企業代表として大塚製薬ニュートラシューティカルズ事業部・内山研究員にも登壇していただきました。その後、一般市民向けに分かりやすく編集した動画を、日手会ホームページ「一般の皆様」に公開しています。これによって、一般市民の方々に日手会を知っていただくことを目指しております。

第68回(2025年度)学術集会@横浜でも、「手根管症候群・腱鞘炎(ばね指)」をテーマに、合同公開シンポジウム「メノポハンド」を開催予定です。今回は、メイラ社が広告後援に加わり、下江隆二先生(メノポ総論)・山中芳亮先生(基礎研究)・原友紀先生(CTS電気診断)・名倉一成先生(CTS review)・岩倉菜穂子先生(ばね指診断・ストレッチ)・松浦祐介先生(ばね指トリウムシノロン・手術)に登壇いただき、後日日手会ホームページに公開予定です。是非、会員皆様の本シンポジウムへの参加をお待ちしております。

以上のように、本委員会は2～3ヵ月毎にweb会議を行っており、手外科の認知度向上を目指す本委員会への皆様の御理解と御協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

橈骨遠位端骨折診療ガイドライン第3版策定委員会

担当理事 **森 谷 浩 治**
委員長 **西 脇 正 夫**

橈骨遠位端骨折診療ガイドラインは、2008年に初版、2017年に第2版が刊行されました。第2版の発刊から7年以上が経過し、その間に橈骨遠位端骨折に関して膨大な数の論文が世界中で発表され、治療法も大きく進歩しています。また、診療ガイドラインの作成方法も変化し、2014年に刊行された「Minds診療ガイドライン作成マニュアル」は、2017年と2020年に改訂されています。

このような背景を受け、最新の診療とガイドライン作成の手法に対応するために、2024年に「橈

骨遠位端骨折診療ガイドライン第3版策定委員会」を設置し、同年10月に第1回委員会を開催しました。2025年1月の第2回委員会では、「Minds診療ガイドライン作成マニュアル2020 ver.3.0」に準拠し、スコープとCQ (Clinical Question) の検討を行いました。今後は設定したCQに対して、スコープに記載された方法にのっとり、システマティックレビューを実施し、エビデンス総体の評価を進める予定です。

第2版では2009～2014年の6年間を対象に文献検索を行いました。第3版ではその後の10年間を対象となるため、抽出される文献数の増加が見込まれます。そのため、委員のみで全ての文献を評価するのは困難と考えています。第1版と第2版では日本手外科学会代議員の皆様全員に構造化抄録の作成を行っていただきましたが、第3版でも文献評価に関するご協力をお願いする予定です。何卒、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。また、「橈骨遠位端骨折診療ガイドライン作成協力者」として委員会に加わっていただいた5名の先生方に、システマティックレビューの実施とエビデンス総体評価のための基本情報の提供をお願いする予定です。

エビデンス総体の評価後は、益と害のバランスを勘案して推奨を決定し、本文を作成いたします。その後、パブリックコメントを募集して最終原稿を完成し、2027年5月の発刊を目指しております。

本ガイドラインが臨床の現場で広く活用され、患者と医療者の意思決定に大いに役立つものとなるよう尽力してまいります。皆様のご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

担当理事：森谷 浩治

委員長：西脇 正夫

副委員長：長尾 聡哉

委員：市原 理司、檜山 尚弘、坂 なつみ、坂本 相哲、鈴木 大介、千葉 恭平、仲 拓磨、中山 健太郎、
檜崎 慎二、松浦 佑介、山口 幸之助、山崎 宏、米田 英正

アドバイザー：

安部 幸雄、今谷 潤也

橈骨遠位端骨折診療ガイドライン作成協力者：

上原 浩介、黒田 拓馬、高橋 洋平、筒井 完明、松田 匡弘

橈骨遠位端骨折診療ガイドライン作成アドバイザー：

泉山 公、川崎 恵吉

教育研修会・学術集会お知らせ

◆ 2024 年度教育研修会 ◆

会 期：2025年1月20日(月)～3月20日(木)

会 場：WEB開催(オンデマンド配信)

詳 細：<https://jssh-2024.c-cloud.co.jp/>

◆ 第 68 回日本手外科学会学術集会 ◆

会 期：2025年4月10日(木)～11日(金)

会 場：パシフィコ横浜ノース

会 長：三上 容司(横浜労災病院 整形外科)

詳 細：<https://www.2025jssh68.jp>

関連学会・研究会のお知らせ

◆ 第 37 回日本肘関節学会学術集会 ◆

会 期：2025年3月14日(金)～15日(土)

会 場：岡山コンベンションセンター

会 長：今谷 潤也(岡山済生会総合病院 副院長)

詳 細：<https://www.kwcs.jp/elbow2025/index.html>

◆ 第 37 回日本ハンドセラピィ学会学術集会 ◆

会 期：2025年4月11日(金)～12日(土)

会 場：パシフィコ横浜ノース 4F

会 長：井部 光滋(札幌徳洲会病院 整形外科外傷センター)

詳 細：<https://www.jhts37hand.jp/index.html>

◆ 第 68 回日本形成外科学会総会・学術集会 ◆

会 期：2025年4月16日(水)～18日(金)

会 場：ホテルニューオータニ

会 長：櫻井 裕之(東京女子医科大学形成外科)

詳 細：<https://site.convention.co.jp/jsprs68/>

◆第 98 回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：2025 年 5 月 22 日（木）～25 日（日）
会 場：東京国際フォーラム・JP タワー ホール&カンファレンス
会 長：岩崎 倫政（北海道大学大学院 医学研究院整形外科学教室 教授）
詳 細：<https://www.congre.co.jp/joa2025/index.html>

◆第 36 回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：2025 年 9 月 19 日（金）～20 日（土）
会 場：北九州国際会議場
会 長：酒井 昭典（産業医科大学整形外科学 教授）
詳 細：<https://www.congre.co.jp/jpns2025/index.html>

◆第 40 回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：2025 年 10 月 16 日（木）～17 日（金）
会 場：リンクステーションホール青森・ホテル青森
会 長：石橋 恭之（弘前大学大学院医学研究科整形外科学講座）
詳 細：<https://site.convention.co.jp/joakiso2025/>

◆第 34 回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：2025 年 10 月 16 日（木）～17 日（金）
会 場：ライカ南国ホール
会 長：門松 香一（昭和大学 形成外科 主任教授）
詳 細：<https://jsprs-kiso2025.com/>

◆第 52 回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会 期：2025 年 11 月 27 日（木）～28 日（金）
会 場：有明セントラルタワーホール&カンファレンス
会 長：岡崎 睦（東京大学 形成外科）
詳 細：<https://shun-convention.jp/jsrm52/>

◆第 36 回日本小児整形外科学会学術集会◆

会 期：2025 年 11 月 28 日（金）～29 日（土）
会 場：パシフィコ横浜 会議センター
会 長：稲葉 裕（横浜市立大学 整形外科 教授）
詳 細：<https://procomu.jp/jpoa2025/index.html>

◆第 43 回中部日本手外科学会◆

会 期：2026 年 1 月 24 日（土）

会 場：岡山コンベンションセンター

会 長：西田 圭一郎（岡山大学病院運動器疼痛センター）

詳 細：<https://www.jssh.or.jp/doctor/cjhand/>

◆第 40 回東日本手外科研究会◆

会 期：2026 年 2 月 11 日（水・祝）

会 場：仙台国際センター

会 長：鳥谷部 荘八（仙台医療センター形成外科手外科 東北ハンドサージャリーセンター）

詳 細：<https://www.jssh.or.jp/doctor/ejhand/index.html>

編 集 後 記

春暖の候、皆さまいかがお過ごしでしょうか。桜が咲き誇り、新たな出発の季節を迎える中、日本手外科学会の第68回学術集会も間もなく開催されます。今回お届けする日手会ニュース61号では、学術集会の開催に向けた三上容司会長のご挨拶をはじめ、多くの先生方に貴重な寄稿をいただきました。「Traveling Fellow報告記」では、米国、香港、韓国を訪問された先生方の貴重な体験が詳細に記されており、今後留学や国際交流を検討されている先生方にとって、大変参考になる内容となっています。「手外科バトンリレー」では、3月にワシントンDCで行われたIFSSH学術集会でPioneers of Hand Surgeryに選出された金谷文則先生にご寄稿いただきました。先生のご経験を通じて、先人の積み重ねた知識と技術の上に新たな発展を築くことの大切さが伝わる、示唆に富んだ内容となっています。また、「手外科医のリスクマネジメント」では、若林良明先生により、説明と同意取得が必要となる対象や内容について詳述していただきました。「Joyの声」では大田智美先生、「リレーエッセイ」では山中浩気先生にご執筆いただきました。お忙しい中、ご協力いただいた先生方に心より感謝申し上げます。さらに、本号では各委員会報告も掲載し、日本手外科学会の活動の現状や今後の展望についてお伝えしております。一方で、日本手外科学会を長年にわたり日本手外科学会を牽引されてこられた阿部正隆先生、山野慶樹先生、薄井正道先生、田中清介先生のご逝去が報告されました。先生方の多大なるご貢献に深く感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

新年度を迎え、多くの先生方が新たな挑戦に取り組まれることと思います。春の訪れとともに、皆さまのご健勝とさらなるご活躍を心よりお祈り申し上げます。

（文責：荻窪病院 西脇正夫）

広報渉外委員会

（担当理事：古川洋志，委員長：佐藤光太郎，アドバイザー：岸 陽子

委員：金谷耕平，堂後隆彦，中川夏子，原 友紀，宮崎洋一）